

確認されたので、北側に2グリッド、西側に4グリッドを増設して調査した。

特に、この調査区の拡張とともに、南北のグリッドの呼称が煩雑になるので、基点A1を7m南に移動し、当初のA1をA7として、順次記号番号を繰り下げる石塚(ケルン)の精査と実測を実施した。なお、東西のグリッド名は、そのままM以下の記号を順次使用してグリッドを増設した。従って、設定されたグリッドは、東西にA~Pグリッド、南北に1~27グリッドとなり、調査区は計432m²に達した。

中与惣塚附近の微地形は、南東方に向って3°ほど緩く傾斜している。地層は、石塚(ケルン)の南東裾部附近



写真41 北西から見た中与惣塚



写真42 南西から見た中与惣塚

では、表土層(第1層)がおよそ10~15cmの芝土を含む黒色土層(第1層)で、その下層に5cmほどの薄い暗褐色土層(第2層)、さらに、その下層に黒色土の混じる5cmほどの黄褐色土層(第3層)があり、その下層に礫の混じる泥流層からなる黄褐色土層(地山第4層)が続いていた。北東裾部では、第3層を欠き、5~10cmの表土層(第1層)の下層に、5cmほどの薄い暗褐色土層(第2層)があり、さらに、その下層に礫の混じる黄褐色の泥流層(第4層)が続いていた。中与惣塚は、盛土をしないで表土層の上に直接石を積んでいる。石塚(ケルン)長径の主軸は、N E - 26° - S Wの



写真43 中与惣塚の全景

21)。

石塚(ケルン)は、詳細に観察すると、構造的にいくつかの礫群が複合して形成されているものと推定される。すなわち、この石塚(ケルン)は、単一の集石、あるいは石積みの塚ではなく、裾部がいくつかの円弧を描き、それぞれの中心に大きな扁平の礫を配置した複合構造をもつものと考えられる。

例えば、写真41は、石塚(ケルン)を北西方から写したものであるが、手前の標識杭の左手(中心J24グリッド附近)に1つの礫群のまとまりがあり(表9-6)、高さが51cm、径342cmほどの規模である。

さらに、写真右上にも(中心J14グリッド附近)、高さが64cm、径がおよそ300cmの礫群の存在を明確に写し出している(表9-3)。そして、写真上の左側の木の根元附近が、中与惣塚の主体部をつくる最も規模の大きい石積み(表9-1)の位置(E15グリッド附近)である。

写真42は、41の写真の逆方向、すなわち、南西から撮影した石塚(ケルン)の姿である。右端の最も大きな石積み遺構の主体部分(E15グリッド附近)とは別に、中央より左手に円弧をつくる礫群(中心J14グリッド附近)が認められる。これは写真41の右上部分の礫群(表9-3)である。

整理番号	中心部位置	径 cm	高さ cm	頂上レベル	裾部レベル
1	E 15 グリッド	540	91	124	215
2	D 2 2	370	55	170	215
3	J 1 4	300	64	122	186
4	J 1 2	335	24	117	141
5	F 1 0	245	39	141	180
6	J 2 4	342	51	209	260
7	C 2 4	344	38	224	262
8	E 1 9	340	28	208	230

表9 石塚(ケルン)の推定複合構造

プランであり、全遺構の長径がおよそ20.7m、短径がおよそ12.9mである。

石塚(ケルン)の高さは、最も高い位置が南側の地表からおよそ70cm、北側の地表からおよそ150cmである(図21)。

写真43 中与惣塚の全景

これらのいくつかの礫群の纏まりは、複合によって不明確になっている部分もあるが、礫群にはそれぞれ輪郭と、中心に大きな平石や角礫で築いた主体部、周辺部よりもかなりの高さが認められる。

石塚(ケルン)の積み石は、いずれも蓼科山の輝石安山岩と角閃石安山岩

を用い、拳大から10cm前後の円礫・亜円礫を主体にして、中心部分では15~30cmほどの大きな扁平の礫と角礫を円環状に配置して主体部をつくっている。

現在確認できる石塚（ケルン）の構造は、およそ8つの礫群の複合によって構成されているものと推定される（表9）。しかし、石塚（ケルン）の東側裾部分は、道路工事による破壊が伝えられているので、正確な構造を把握することは困難である。

遺構の構築時期は、遺構の残存状態から推定して、E15グリッド附近に中心をもつ中央南側の径540cm、高さ91cmの礫群（表9-1）が、最も完全な形態を保ち、南側（中心F10・J12グリッド）で2つの礫群（表9-5・4）、北側でもE19グリッドを中心とする礫群（表9-8）の上に複合し、この遺構が最も新しい遺構と考えられる。

中央北側の礫群（E19グリッド・表5-8）は、さらに北東の礫群（中心D22グリッド附近・表9-2）とも複合し、北側の輪郭が明確でない。北東の礫群（表9-2）は、径370cm、高さ55cmの規模と推定される。

E15グリッド附近を中心にする礫群（表9-1）は、中央やや東側寄りに20cm×10cm前後の平石を10個ほど使って、外径およそ60cm、内径30cmほどの円環状の石組を築いている。内部の構造は、現在かなり攢拌されて掘り深められているが、これは後日の人為的な原因によるもので、中央に立ち上がっている大きな平石は、かつては水平に置かれて、その上に祠がつくられていたものと考えられる（写真44）。



写真44 中与惣塚の主体部



写真45 北西裾部の遺物出土地点（荷札地点）

また、石塚（ケルン）の西端部には、C24グリッドを中心とする礫群があり（表9-7）、G24・25附近にも、中心に礫群の主体部と思われる大きな平石が認められる。しかし、樋部の礫がかなり失われているので、礫群の輪郭は不明確である。北東隅の礫群（表9-7）は、径がおよそ344cm、現在の高さが38cmで、中央やや南寄りに大きな平石が円環状に配置され、その間に植と太いズミの木、ニシキ木の古木が生えている。この礫群の北西の裾部で熙寧元宝1枚が検出された。

今井亀三郎氏の話によると、石塚（ケルン）の東側、すなわちA17~26グリッド附近は、県道改修時に敷石用として、1t トラックで数台分の礫を搬出したといわれる。従って、この附近の遺構の現況は、かなり変形していることになる。また、積み石の現状から推考すると、さらに、B13~18グリッド附近からも、かなりの礫が搬出された可能性がある。

中与惣塚は、雑草刈り取り、落葉松などの落葉を清掃すると、石塚（ケルン）表面の礫が直ちに露出した。法印塚・与惣塚の調査例では、石塚（ケルン）の表面に、4~5cmほどの覆土（腐植土）が薄い、その下層から石塚（ケルン）の礫面が検出された。中与惣塚の場合は、これらの状況を総合すると、すでに昭和41年の調査時に、礫上面の芝上を取り除いて精査し、遺物を採集したものと思われる。

平成6年の調査では、石塚（ケルン）の石積みの全面にわたって精査したが、石塚（ケルン）の中央部分からは、平石の前面で青灰色の楕円形の河原石を検出した（図版IV）以外、遺物は全く検出されなかった。

遺物が検出されたのは、昭和41年の調査推定地区から外れた柵外の北西裾部附近であり、ここから熙寧元宝を1枚を検出し、さらに、調査区を柵外に拡張した北西隅の右塚（ケルン）裾部のH~J26グリッドの礫の間からも開元通宝・咸平元宝・皇宋通宝が各1枚、西側の裾部から紹聖元宝が1枚検出された。

(3) 中与惣塚の性格と築造年代

昭和41年の調査の採集遺物は、御正体が13個（図22）、羅繩9個（図23）、鉄釘8本（図24）、北宋錢を主体とする錢貨が39枚（表10・図25上欄）である。これらの出土遺物は、現在夢科山麓の立科町資料館に保存されている。また、平成6年の調査で検出された遺物は、開元通宝1枚と北宋錢5枚である（表10・図25下欄）。

桐原健氏は、「報告書」で中与惣塚の築造年代について、錢貨が北宋錢を主体とすること、

銭造国	銭貨名	初鋳年	書体	枚数	
				昭和41	平成6
唐	開元通寶	621		4	1
唐	乾元重寶	758		1	
北宋	咸平元宝	998			1
北宋	景德元宝	1004	真書	1	
北宋	景祐元宝	1034	真書	1	
北宋	皇宋通寶	1038	篆書		1
北宋	熙寧元宝	1068	篆書	1	2
北宋	元豐通寶	1078	行書	2	
北宋	元豐通寶	1078	篆書	2	
北宋	元祐通寶	1086	篆書	2	
北宋	元祐通寶	1086	篆書	1	
北宋	元祐通寶	1086	篆書	1	
北宋	紹聖元宝	1094	篆書	1	1
北宋	政和通寶	1111	分楷	1	
北宋	政和通寶	1111		1	
明	洪武通寶	1368		3	
明	永樂通寶	1408		3	
日本	寛永通寶	1636		2	
不 明				12	
計				39	6

表10 中与惣塚出土古錢一覧表

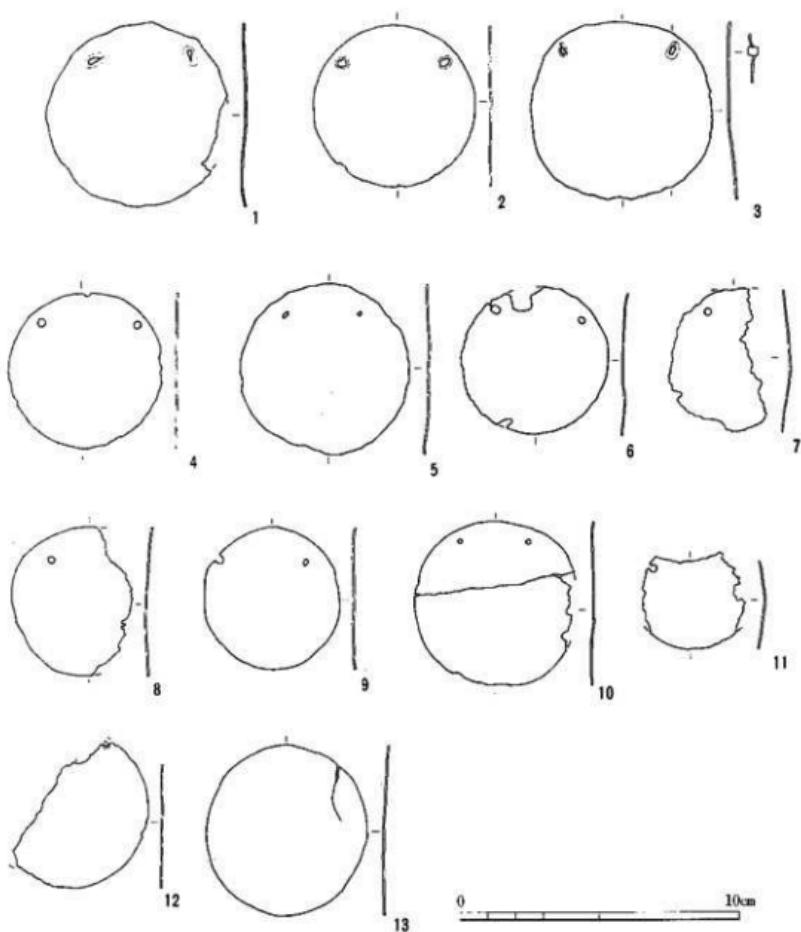


図22 中与惣塚出土遺物・御正体実測図

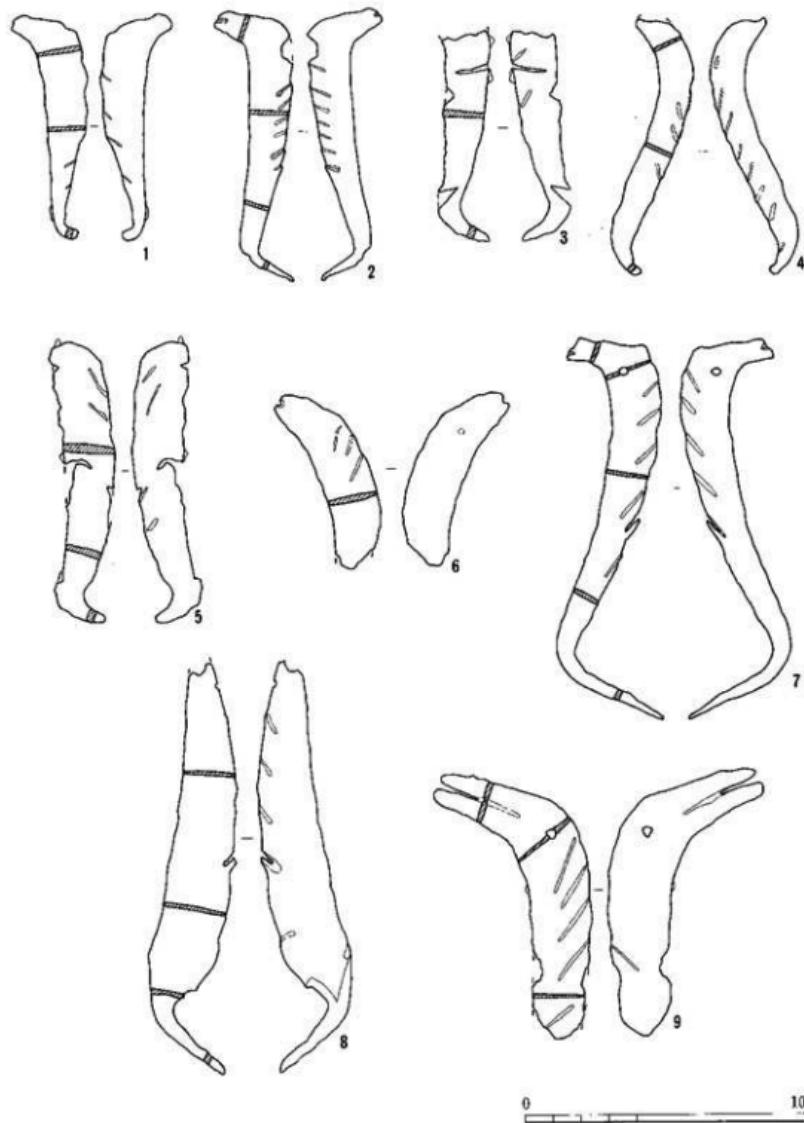


図23 中与惣塚出土遺物・葦縁実測図

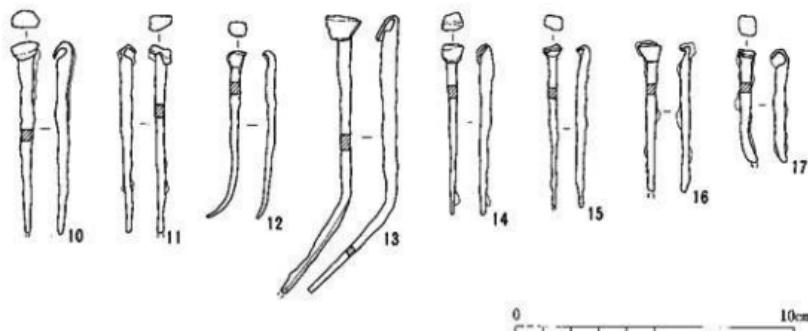


図24 中与惣塚出土遺物・鉄釘実測図

図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
径 mm	65	57	63	56	61	52	50	53	50	58	35	55	61

表11 中与惣塚出土の御正体計測値一覧表

図番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
形式	A	B	B	B	A	A	B	A	C
長さ mm	77	95	74	90	101	65	135	147	100
幅 mm	16	15	13	13	18	18	15	23	25

表12 中与惣塚出土の薙鎌の形式と計測値一覧表

薙鎌の形式と御正体などの特徴を総合して、「まづは鎌倉末、降っても室町初期」としている。すなわち、検出された北宋銭はいずれもかなり磨耗し、洪武錢・永樂錢などの明錢を伴出してのことから、中野市田代の占銭出土土地と同時期の室町初頭まで下るものとし、藤森栄一氏は、薙鎌について鎌倉末から室町初期と考えている。

昭和41年の調査では、これらの遺物とともに、中央の平石附近から8本の鉄釘が採集されている。うち5本は、長さ5.7cm~7.8cm、1本は14.2cmを測り、径も6mm以上の太さがある。この鉄釘の出土は、石塚(ケルン)中央の平石(写真44)の上に、かなり大きな祠が築かれ、御正体を御神体とし、薙鎌を神器として祀っていたものと考えられる。

中与惣塚出土の御正体は、径の最大のものが65mm、最も小さいものは一部を欠いているが、現存の径が35mm(破片)で(表11)、上部に小さな釘穴があけられ、その1枚には微かに鍍金の痕跡がある。この御正体は、いずれも祠の板の内側に打ち付けられていたものと考えられる。

薙鎌は馬の頭部・頸部を型取ったとの説もあるが、その形態から薙刀の刃形状のものをA類、馬の頭部と頸部、あるいは蛇が首を立てたように見える形式をB類、鳥の嘴状のものをC類

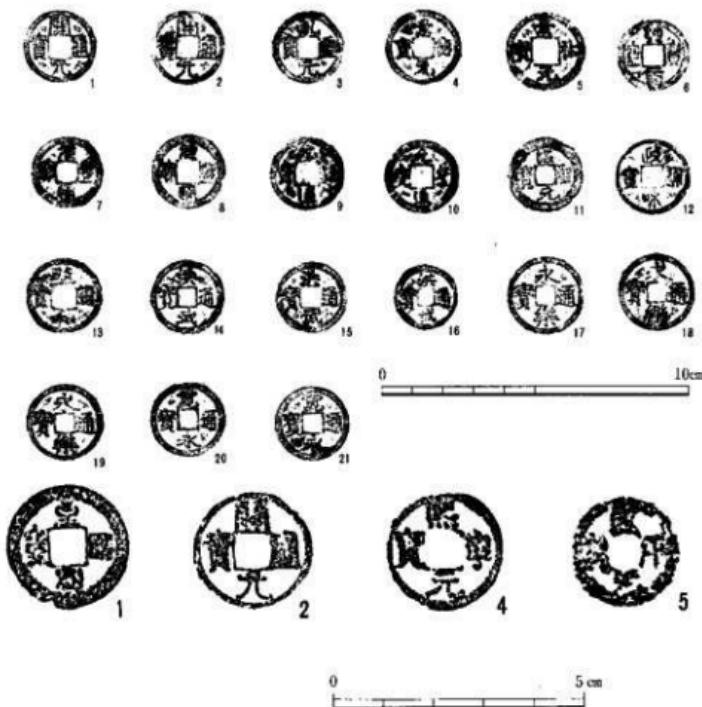


図25 中与惣塚出土遺物・古銭実測図

とした。この分類によるとA類4・B類4・C類1であり、湾曲しているので長さはやや不正確であるが、最大が147mm、最小が65mmである。

蘿麻は、諏訪大社の神器であり、寅申の干支の年に行われる社殿の造営に際して、御柱の神木が選ばれると、悪霊や災難を避けるために立木の幹に打ちつけられる。この御柱祭の起源については諸説がある。諏訪上社大祝庶氏家の一族諏訪円忠が延文元(1336)年に著した『諏方大明神畫詞』に、

「寅申の支干ニ当社造営アリ、一國ノ貢祝(税)、永代ノ課役、桓武の御宇ニ始レリ、但遷宮ノ法則諸社ニハコトナリ、自元古新ニ社相並テ断絶セス」

とあり、また、同書に、

「是則向社・同末社一同ノ儀也、サレハ彼年暦ニ当レハ、初春ヨリ国司ノ日代巡役ノ官人ヲ

大行事ニ差シ定メ、御符ヲキリ、
国中ノ要路ニ闇ヲスヘテ神用ヲ分配ス」

とある。葦鎌は、「御符ヲキリ、国中ノ要路ニ闇ヲスヘテ神用ヲ分配ス」とあるように、諏訪神の神威の及ぶ範囲を示す神器として分与され、葦鎌打の神事が行われている。例えば、信越国境の北安曇郡小谷村中土の諏訪神社と戸土の諏訪社で、御柱年の前年に行われている葦鎌打の神事は、7年に1度諏訪大社から神器の葦鎌2口を中土の諏訪神社の例祭に捧げられ、翌日国境の杉の大木に葦鎌を打込む神事である。

この葦鎌打の神事は、単に諏訪神の神威の及ぶ範囲を示すだけでなく、異国の神・災厄の侵入を防ぐ塞の神信仰が背景にあるものと考えられる。

塞の神信仰、道祖神の古い形態には、柴折りや石積みの習俗が多く伝えられている。サイノカミ信仰と石積みの習俗は、東北の岩手県が多く12件、関東地方では茨城県の1件・群馬県の1件・千葉県の4件が報告され、近畿では新潟県の3件・岐阜県の7件が知られている。しかし、民俗学研究のメッカといわれる長野県の報告例は、寡聞にして知らない。

雨境峠の中与惣塚などの石塚(ケルン)は、明らかに石積みの塚であり、蓼科の神に対する信仰とともに、佐久と諏訪の境、雨境峠の峠道に積まれた石塚(ケルン)で、岐の神・塞の神の信仰と深い関係があるものと考えられる。また、葦鎌を馬形と解した場合、祈雨祭に関係があるともいわれている。

また、サイノカミ信仰には、近親相姦の説話をともなう場合が多いといわれるが、中与惣塚では、小県郡津の四の宮城主根津神平と諏訪高嶋城主の姫との恋愛の伝承が唯一男女の話として伝えられているだけである。

平成6年の調査で、石塚(ケルン)の北西隅から出土した北宋銭は、西側裾部から検出した紹聖元宝を除けば、やや時期的に古い唐銭と北宋銭が、いずれも石積みの北西裾部附近から検出されている(表10)。この出土状態は、石塚(ケルン)の裾部から蓼科山を望んで古銭を奉斎したことを見唆するものである。

これに対して西側出土の紹聖元宝は、このような蓼科山との方位関係が薄く、時期的にもやや年代が離れている。従って、中央南(表9-1)、あるいは中央東側の縁群(表9-8)に関係する



写真46 中与惣塚出土の葦鎌

遺物が混入したとも考えられる。

昭和41年の採集遺物は、『報告書』に出土状態、具体的な出土位置などが記されていない。この古銭が中央の平石附近から出土したとすれば、祠に祀られた塞の神などに奉斎された可能性が大きく、北西隅部出土の古銭とはやや性格を異にするように思われる。

中与惣塚の北西隅は、写真41でみた表9-6の礫群がある地点であり、礫群の複合状態と出土した古銭などの調査結果を総合すると、昭和41年に調査された中央の礫群(表9-1)よりやや古い時期に積まれた石塚(ケルン)と考えられる。

従って、中与惣塚の石塚(ケルン)築造の年代は、少なくとも8個の礫群が、鎌倉時代後半ころから室町時代初期にわたって次第につくられ、最後に中央南側の表9-1の石塚(ケルン)が積まれて、大きな平石と角礫を配し、中央に祠がつくられ、御正体と華縁が御神体として奉祀されたものと考えられる。

注

1 桐原健『長野県北佐久郡立科町祭祀遺跡群の踏査報告書』P13~14

立科町教育委員会 昭和41年 『町の文化財』 昭和48年

「ケルンではあるが、現在は芝が覆い旅人の結構な休み場となっている。頂上にはコナシの若い樹が生えている。発掘調査ではないので、塚の構造については断言を避けるが、石塊は溶岩質の山石で、これに丸い河原石が混じっている。表面採集の結果では遺物は発見されていない。」

と記し、中与惣塚の場合も、表面を芝上が覆っていたことを伝えている。そして、

「中央に大きな平石があつて、同石を中心にして石塊の間から古銭・銅板・華縁・釘などが採集された。」と続けて記している。

すなわち、前段では表面採集による遺物は採集されなかったとし、後段で平石の状態とその周辺から豊富な遺物を採集したとする調査の実情を述べている。

2 注1と同じ。中与惣塚の出土遺物については、この報告書、及び同文の内容が雑誌『信濃』第19巻第6号「長野県北佐久郡立科町兩塙跡祭祀遺跡群の踏査」に詳細に記されている。

本稿では、桐原氏の論文との重複を避け、説明を省略することにした。

3 信濃史料刊行会『諏訪大明神靈祠』『新編信濃史料叢書』第3卷 P68 信濃史料刊行会 昭和46年

4 長野県教育委員会『諏訪信仰者俗』『長野県民俗資料調査報告』12 P211 長野県教育委員会 昭和47年

5 大津建彦『造祖神と地蔵』 三弥井書店 平成4年

(4) 与惣塚

与惣塚は、中与惣塚の南西およそ260mの県道源訪・小諸線の西脇に位置し、全面が雑草に覆わ

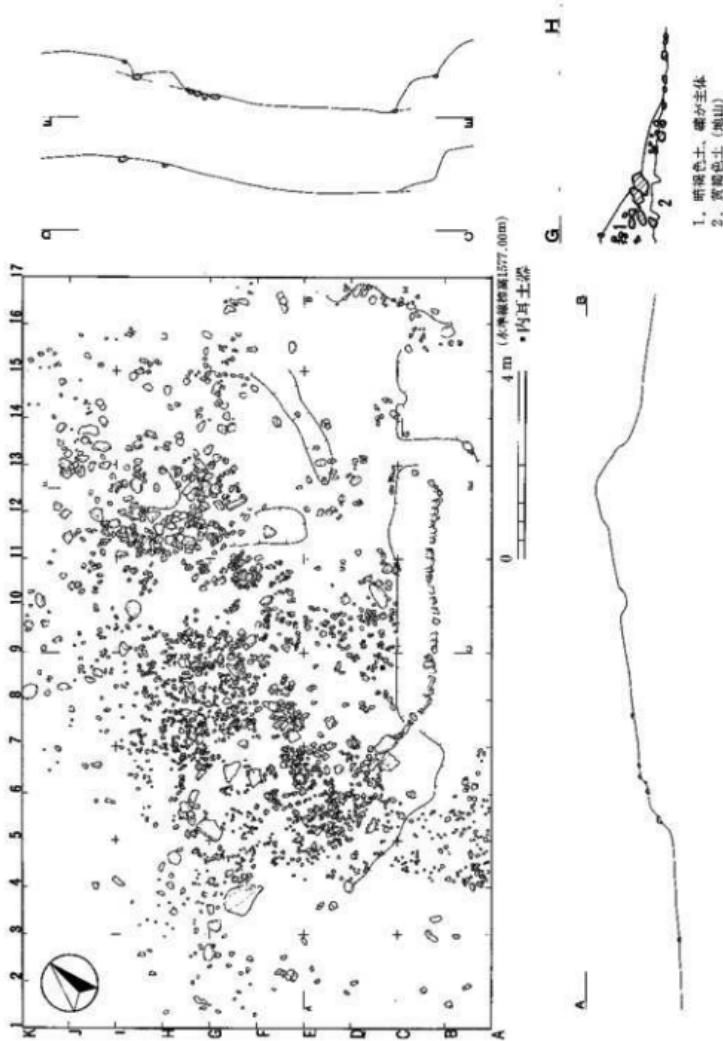


图26 与物种遗踪共测图



写真47 北西から見た与惣塚



写真48 南西から見た与惣塚 (矢印 盛土部分)

れていた。石塚(ケルン)表面の雑草を刈り取ると、県道の改修工事の際の採石により、東側の約半分と北側が削られ、南西裾部も大きく抉られていた。そして、石塚(ケルン)の北方には、工事用の残土が捨てられて尾根状を呈し、石塚(ケルン)の形態を判別するのも困難なほどに

変形していた。

与惣塚の調査は、中与惣塚の調査の進行状況と調査協力員、調査補助員の配置を考えながら、8月5日から着手した。まず、発掘調査は、石塚(ケルン)の南端裾部から7m

の位置を基点A1とし、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の走行方位に沿って南~北東に1m×1mのグリッドを1~16グリッド、南~南西にA~Jグリッドを設定した。調査区の面積は、およそ112m²で、石塚(ケルン)の頂上附近から裾部に向って調査に着手した。そして、同時に北方にある尾根状の土盛の性格を把握するため、慎重に盛土を掘り下げたところ、明らかに攪拌された地層で、石塚(ケルン)とは



図27 与惣塚出土遺物実測図

関係のない工事用の残土であることが判明した。

この部分の調査は、慎重に残土を取除きながら裾末端部の検出に努め、幸い最下層に僅かに残存する裾部の輪郭を発見することができた。その後の調査は、この輪郭を基準にして、引き続き北東部から東部の裾末端部を追究し、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の道路下に続く裾部の輪郭をほぼ検出することができた。

また、北西部から南東部にかけて精査を継続したが、この部分の石塚（ケルン）裾末端部は、殆ど輪郭の痕跡も失われ、僅かに残る蝶の分布によってようやくその輪郭を推定した。

与惣塚は、主軸がN E - 30° - S Wのプランで築かれ、南北の径が13.3m、東西の径がおよそ13.8mと推定される。高さは、地山の泥流層が南西に7°ほど緩く傾斜し、現状での計測値は、南西側の地表から189cm、北東側の地表から149cmを測り、原形はほぼ円形であったと考えられる（図26）。

石塚（ケルン）の構造は、露出した断面を精査した結果、表土層の上に直接安山岩の礫を積んで築き、盛土はしていないことがわかった（図26右端）。積石は、拳大の礫を主体として、30~50cmほどの大きな平石や角礫も使われている。構造的には、法印塚の構築法ときわめてよく似ている。

頂上のE11グリッド附近には、幅が90cm、長さが120cm以上にわたって深く埋込まれた痕跡があり、H12グリッド附近の古木の根元にも抉られたような痕跡が残っている。この頂上には、檜とミズナラ・ズミ・ニシキ木などの古木が生え、削七によって東側部分の根元が露出していた。

これらの古木については、調査後枯死を防ぐために、削られた東際の根元に約70cm幅の盛土をし、残土で根を覆って保護を図った（写真48・矢印部分）。

出土遺物は、頂上のC8グリッド北東隅の覆土の中から内耳土器の胴部破片1個（図27）とD11グリッドから8世紀ころの土師器の小破片1片が検出された。内耳土器片は、径24cmほどの胴部破片で、鎌倉時代後半に位置づけられる遺物である。

また、今井亀三郎氏の話では、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線の改修工事で石塚（ケルン）を削り、土石を採取した際に、頂上附近から直刀一振が出土したといわれる。しかし、この直刀は、間もなく工事小屋附近で紛失し、所在は全く不明であるという。

与惣塚の築造年代は、出土遺物が極めて乏しく、推考は困難である。敢えて考察するとすれば、頂上から検出された内耳土器が一つの手がかりとなろう。

与惣塚・中与惣塚・法印塚の3つの石塚（ケルン）は、中与惣塚を中心にして、兩境峠の頂上附近に築かれ、法印塚の脇には明らかに古道の痕跡がある。

法印塚は小諸藩士稻垣市右衛門の夢科山見分の記事「立科山覚附」に、

「右鏡石より少し竪り右の方に傾城塚有り、此塚向合ひに与惣大塚といふ有り」

とある。この記事によると法印塚は、江戸時代中頃の道より少し離れた「右の方」を通っていたものと考えられる。

従って、法印塚の脇を通る道は、それ以前の中世の道と考えてよいであろうか。与惣塚の性格は、中与惣塚と同様に、中世の道に関係する石塚（ケルン）であり、夢科神を祀り、塞ノ神・岐の

神を祀ったサイノカミ信仰と関係の深い遺構と考えてよいであろう。

雨境峠の頂上附近に築かれたこの石塚(ケルン)は、峠の祭祀研究の重要な遺構であり、貴重な文化遺産である。この遺構を大切に保存するとともに、今後一層精緻な調査研究によって、多くの残された課題が解明されることを期待したい。

3 中世の古道

雨境峠には、2つの性格の祭祀遺跡群が存在する。その1つは、古東山道に関係すると考えら

深さ cm	W			E		
	0	1.0	1.5	2.5	3.5	4.5
2.5	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0
5.0	1.0	5.0	1.0	0.0	0.0	0.0
7.5	1.0	5.0	3.0	5.0	3.5	0.0
10.0	1.0	13.0	8.0	6.3	3.5	3.0
12.5	1.0	17.0	12.0	6.3	3.5	5.0
15.0	3.0	14.0	14.8	10.0	3.5	5.0
17.5	3.5	12.5	16.0	15.5	3.5	7.0
20.0	4.0	10.0	15.0	15.5	3.5	7.0
22.5	4.0	10.0	11.0	17.5	3.5	7.0
25.0	3.8	18.0	18.0	16.5	3.5	7.0
27.5	3.8	17.0	18.0	15.0	3.5	9.5
30.0	3.8	18.0	18.0	14.0	12.0	9.5
32.5	3.8	16.8	ston	17.0	12.0	13.0
35.0	8.5	18.0		19.0	16.0	22.0
37.5	10.0	21.0		16.5	ston	21.2
40.0	10.8			18.0		18.0
42.5	10.8			ston		13.5
45.0	10.8					

表13 中与惣塚北方20mの推定路面硬度

れる鳴石・勾玉原・赤沼平(女神壇)・鳴石原・鍵引石など5つの祭祀遺跡である。他の1つは中世の古道に関係すると考えられる法印塚・中与惣塚・与惣塚など3つの石塚(ケルン)と賽ノ河原など計4つの祭祀遺跡である。

今回の調査は、これらの雨境峠祭祀遺跡群の遺跡の位置・範囲・現状の把握などを目的とした調査と、祭祀遺跡と深い関係をもつ古道の位置・規模・構造などの確認を目的として、今後の研究の基礎資料を収集し、併せて貴重な文化財の保護に資するための調査を並行して実施した(図19)。

古道の調査は、平成4年の夏に中世の古道の基礎的データを得るために、中与惣塚の北側に隣接する地点で実施した。

この調査地点の古道跡は、10~15cmの黒色土からなる表土層の下層に、



写真49 法印塚脇の古道跡

極めて硬く締った暗褐色土層が検出された。この地層は、厚さがおよそ20cm、最大幅が260cmで、黒色土と地山の小さな礫を含む黄褐色土が、人の通行などによって捏ね合わされ、次第に形成された地層と考えられる。

この地層は、大起製貫入式土壤硬度計（以下硬度計と略記する）による硬度調査の結果、表13の計測値（以下計測値と略記する）が検出された。

この計測値は、東西両側の値が3.5~4に対し、道跡と推定される

地点の値は、10~18ときわめて高い数値を示している。この地点は、法印塚の東脇から続く古道の延長線上にあり、中与惣家の東脇を通る中世の古道と推定される。

また、この計測値は、その下層に厚さ10cmほどのさらに硬い地層の存在を示している。この地層の幅は、発掘調査の地層断面でみると、およそ360cmを測り、地図上の推定では、この地点をとおる古東山道の路面と考えられる。

従って、中世の道の推定路面は、中与惣家の北側で古東山道の道筋に重なっている可能性がある。因みに、このような複合は、この附近で発見されただけで、後述する法印塚の東脇では全く認められない。

平成5年には、法印塚の東脇の古道と、その附近を南北に延びる古道の痕跡を辿って、勾玉原地籍の2地点で発掘調査を実施した。

法印塚の脇の地層は、熊笹の根を主体とする芝土と黒色土からなる20cmほどの地層があり、その下層に、厚さ15cmほどの硬い暗褐色の地層を認めた。その幅は、およそ230cmを測り、計測値は古道の東西両側が6~7に対

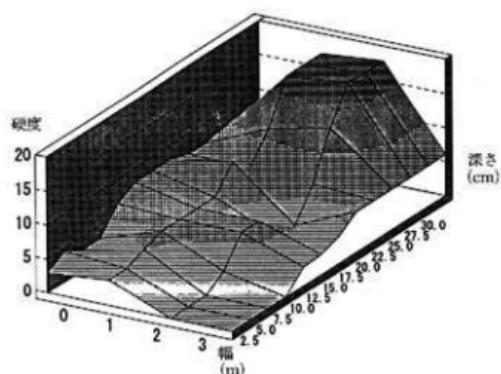


図28 法印塚脇・中世の古道路面の硬度図



写真50 勾玉原III地籍の古道



写真51 硬度計による調査風景

して、11~21の高い値を示し、明らかに路面と考えられる（図28）。

勾玉原III地籍で検出された古道は、路面幅がおよそ180cm、溝心心間の幅が260cmを測り、計測値が18~20で硬度計の先が大人の全体重をかけてようやく突き刺さるほどに硬く、路面に大きめの平石を配していた。そして、両側を広く溝状に掘り込んで排水を図り、調査した中世の古道の中で構造的に最もよく整備されていた。

この附近の中世の古道は、中与惣塚の東側から法印塚の東脇を通り、丘陵の裾部を北方に下って勾玉原III地籍に達している。そして、古道は、この地点から北方およそ150mに位置する勾玉原II地籍を通っていることがほぼ確認された。

勾玉原II地籍の調査地点は、当初勾玉原遺跡方向へ向う古東山道を推定して設定したトレンチであった。しかし、このトレンチでは、古東山道の路面と推定できる遺構は検出されなかった。そして、トレンチの南東部分で幅250cmほどの硬い暗褐色の地層を検出したので、さらにトレンチを南方と西方に拡張して追究した結果、勾玉原III地籍から続くと考えられる硬く締った地層を確認した。この地層は、暗褐色を呈し、位置と幅員、および走行方位などから推定して、中世の古道と考えられる。この地点の古道は、僅かに道筋を北東に向け、鳴石遺跡の方向に向っているように思われる。

また、勾玉原II地籍のトレンチA 4-6の北端附近から多数の指頭大の黒曜石片が検出された。この黒曜石片は、剥離面がほとんどなく、表面は摩滅した自然面である。従って、この黒曜石片は、石器製作やそのための原石として搬入されたものとは考えられない。

黒曜石の色・透明度・気泡などの特徴からは、長門町の鷹山遺跡群の星森峠の黒曜石採掘跡に散乱する黒曜石片と類似している。トレンチの調査は、黄褐色土の泥流層上面でとどめたが、黒曜石片は、いずれも黑色土層中から検出されている。

中与惣塚から南方方向（女神湖方向）の古道は、今回の調査では確認されていない。中世の古道は、中与惣塚の北側の調査結果から、石塚（ケルン）の東側を通って与惣塚方向に向っていたと考えられる。従って、この附近の古道は、かなりの範囲が主要地方道調査、白樺湖・小諸線の道路敷と複合し、調査は不可能であると考えられる。

兩境峠附近の中世の古道は、調査結果から推考すると、道幅が180~260cmを測り、路面の大き

な礫岩を取除いただけの簡単な構造で、路面の硬度は計測値が10—20程度で固く綺り、側溝などは勾土原Ⅲ地籍の遺構以外は認められなかった。

4 信玄の棒道

(1) 弁天神附近の地質と地形

弁天神は、スズラン峠から白樺高原へ降りきった所である。スズラン峠は、蓼科山山体と八子ヶ峰との鞍部(標高1,750m)の蓼科高原と白樺高原を結ぶ峠である。弁天神は、蓼科溶岩の一部である2,160m溶岩が、蓼科山山頂直下から南に向って流出し、八子ヶ峰の山体にぶつかって流路を北西方に変え、1,700m程度まで流れ下った先端に位置する。

この溶岩流の先端附近からは、豊富な清水が湧き出し、樽ケ沢の源頭となっている。塩沢本堀の源泉・弁天神の出水もこの湧水の一つである。

スズラン峠を越えた信玄の上の棒道は、弁天神、つまり蓼科溶岩の先端をかすめ、さらにいくつかの溶岩流の先端を直線的に結んで、これを迂回しつつ北上している。溶岩流の部分は、地形的に急峻なこと、騎馬の通過する道を作るためには岩盤が固く、工事が困難なことを考慮してルートが定められているものと考えられる。

弁天神附近は、南平凝灰角礫岩を基盤とし、上に薄い表土が乗り、また、蓼科溶岩起源の巨大な岩塊、転石が表面に散在している。棒道の通過部分では、これらの石は横に除けられ、表土が水を含んで柔らかくなっている部分は、数十cm大の石を敷き詰める工事が施されているように見える。そして、使用されている石は、周囲の岩質と同じである。

(2) 信玄の上の棒道の構造

武田信玄は、八ヶ岳山麓の信玄の棒道と大タルミ(大河原峠)越えの佐久の棒道を通って信濃へ侵攻した。

上の棒道は、甲斐の穴山(韮崎市)・若神子新町(山梨県北巨摩郡須玉村)小荒間・(同郡長坂町)を経て、八ヶ岳南麓の上根木・釜原(以上茅野市)を通り、スズラン(大石)峠を越えて蓼科山麓の南平地籍の弁天神・穴小屋、八ヶ野地籍の赤沼平附近を通り、雨境峠を下って芦田方面へ向っていた。

中の棒道は、甲斐の穴山で上の棒道と分れて、大井ヶ森(長坂町)・鳴窓(富士見町)・中新川(原村)を通り、中新田の追分で下の棒道と合し、大久保(茅野市)を通って白樺湖畔の御座岩附近に登り、ここから役の行者道を通って雨境峠へ向う道と、大門峠を小県へ下り、長瀬、そして北信濃方面へ向う道があったといわれている。



写真52 麦草附近の信玄の上の棒道

る。しかし、この説に対して笠本正次氏は、前掲史料の批判を論換に疑問を提起している。

信玄の棒道の建設については、さらに検証の余地があることに異論はないが、武田信玄がこの道を信濃計略の道、信濃侵攻の軍用道路として利用していたことは間違いない。例えば信玄は、天文19(1550)年9月9日に戸石城を総攻撃して敗退し、「高白斎記」の10月1日の条に、

「其夜望月ノ古地御陣所、終日雨、二日暁ヲ越テ諏訪ヘ被納御馬、西刻湯川ヘ御陣所、」

とあり、兩境峠の記述はないが、望月から「峠ヲ越テ」とあるので、地理的にみて兩境峠を越えて諏訪へ向ったものと考えられる。

上の棒道の調査は、古東山道推定路との比較研究を目的として、蓼科山麓の南平麦草地籍で発掘調査を実施した。

この地点は、塩沢本坂の源泉・弁天神の出水の北方およそ200mの位置にある(図31-20)。一帯は落葉松が植林され、その下には熊糞や雑草が密生し、その中を信玄の棒道が文字どおり一直線に走っている。

発掘調査は、8月18日に熊糞を刈り取り、古道の走行方向に対して直角に幅5m、長さ8mの

深さ cm	W					E		
	0	0.5	1.0	2.0	3.5	4.0	4.5	5.0
2.5			ston				3.0	2.0
5.0							7.0	3.0
7.5			1.0	13.0	14.0	13.0	11.0	3.0
10.0			4.0	ston		20.0	ston	4.0
12.5	0.0	3.0	6.0			22.0		
15.0	3.0	6.0	ston					
17.5	3.0	6.0						
20.0	3.0	8.0						
22.5	3.0	8.0						
25.0	3.0	9.5						
27.5	5.0	10.5						
30.0	5.0							

表14 南平麦草地籍・上の棒道の硬度

信玄の棒道の建設は、
『高見澤文書』に、
從甲府源方郡へ之路
次之事、致勅進可作之、
同雖何方之山、剪木可
懸橋者也、

仍如件

天文廿一年十月六日

「 」

とあり、一般に武田
信玄の命によって作ら
れた道と考えられてい

トレンチを設定して調査に着手し、20日に全調査を終了した。

信玄の上の棒道は、蓼科溶岩流の南平凝灰角砾岩を基盤とするおよそ18°の北西斜面の裾部附近を切り開いてつくっている。棒道の東南斜面の地層は、熊笹の根を主体とする20cmほどの表土(第1層)があり、その下層に40~60cmほどの黒ボク土と呼ばれる黒色土(第2層)があつて、その下層に路面と認められる硬く締った褐色土(第3層)が認められた。第3層の厚さは、およそ40~50cmを測り、さらに地山との中間層に、20~30cmほどの礫と黄褐色土が混じる褐色土層(第4層)があり、礫を含む黄褐色土からなる地山がその下層に分布している(図29)。

路面の道幅は、およそ180cmを測り、左右に径50cm~1m余の大石が並べている。東南斜面側の石は、道路敷にあった石を寄せたか、附近にあった石を用いて崩落する土砂の土留めとして並べ、北西側の石は、道路敷を区画するために置いたものと考えられる(写真52)。

そして、路面の覆土は、東南斜面部分より薄く、棒道の中央部分に15cm~50cmほどの平石を用い、およそ40cm幅に路面上よりやや高く築いた中央分離帯のような構造が認められた。この配石の目的は、必ずしも明確でないが、想像するに武田の騎馬軍団が、2頭の馬を並列して走らせるに都合のよい構造である。

路面部分の硬度は、左右の地層が3~5に対し、路肩部分は13~22の計測値を示し、特に東南斜面の下の部分の計測値が高い(表14)。

信玄の上の棒道は、八ヶ岳山麓から蓼科山麓に一直線に通じている。武田の騎馬軍団の「疾風」といわれた機動性は、この軍用道路と甲斐の黒駒によって支えられ、後には信濃の駿馬も加わって、さらに天下にその名を轟かせたものと考えられる。

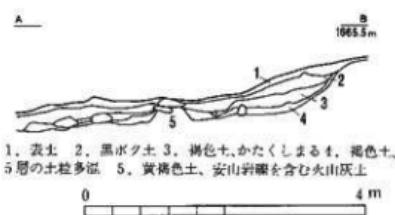
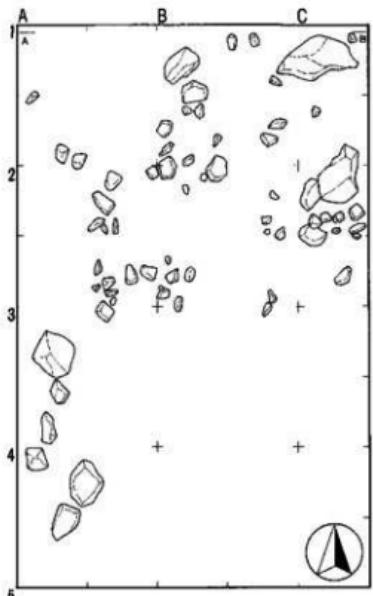


図29 信玄の棒道実測図(1:80)

注

- 1 信濃史料刊行会『信濃史料』第11巻 P542 昭和33年
- 2 筒本正次「拂遺についての一考察」「越後大名武田氏の研究」P58~
- 3 「高白齋記」『新編信濃史料叢書』第8巻 P42 信濃史料刊行会 昭和49年

VI 蓼科山麓の古道

1 東山道と古東山道

古東山道の名称は、令制により中央と国衙（国府）を結ぶ東山道（以下東山道と記す）が開かれる以前の東国計略・経営のための古道の意味で用いられている。

雨境岬祭祀遺跡群には、鳴石・勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）・鳴石原・鍵引石・法印塚・中与惣塚・与惣塚・宾ノ河原などの遺跡があり、白樺湖畔に池ノ平・御座岩¹岩陰遺跡、さらに、土師器を出土した糞輪平遺跡などがある。これらの遺跡は、いずれも道に關係する遺跡と考えられている。そして、鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石・池ノ平・御座岩岩陰などの遺跡は、劍形・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・小玉などの滑石製模造品（幣）の祭祀遺物と6～8世紀ころの須恵器・土師器を出土している。

東山道は、『続日本紀』第二・大宝2（702）年12月壬寅（10日）の条に、

「始めて美濃國岐蘇の山道を開く。」

とあり、『続日本紀』第六・和銅6（713）年7月戊辰（7日）の条にも、

「美濃信濃二國の境、徑道険隘にして往還艱難なり、仍て吉蘇路を通す。」

と記されている。

この大宝2年12月の記事は、信濃に東山道が開かれたことを記したものと考えられる。従って、東山道が大宝2年にはじめて信濃に通じたとすれば、6～8世紀の遺物を出土する雨境岬の祭祀遺跡、およびこれに關係する古道は、東山道が松本平から保福寺²を越えて信濃國府の置かれた上田に通ずる以前の古東山道と考えられる。

また、この古東山道に關係する祭祀遺跡は、6～7世紀の遺物を主体としているが、8世紀の遺物も出土しているので、新たに松本平～上田盆地を経由する東山道が開かれた後も、重要な地方道（伝路）として利用されていたことがわかる。

大和の王權の東征路に関する史料は極めて乏しい。

『日本書紀』では、崇神天皇10年9月の条に、

「大彦命を以て北陸に遣す。武渟川別をもて東海に遣す。吉備津彦をもて西道に遣す。丹波道主命をもて丹波に遣す。」

とあり、ついで景行天皇25年7月の条に、

「武内宿禰を遣したまひて、北陸及び東方の諸国の地形、且百姓の消息を察しめたまふ。」という諸国検察の記事がある。

『古事記』には、崇神天皇の条に、

「大毘古命をば高志道に遣はし、其の子建沼河別命をば、東の方十二道に遣はして、其の麻都

漏波奴人等を和平さしめたまいき」

という『日本書紀』の四道將軍の記事に対応する記事がある。

景行天皇の倭建命東征の記事には、

「東の方十二道の荒夫疏神、及摩都樓波奴人等を背向け和平せ」

とあり、「東の方十二道」という記述は『日本書紀』ではなく、この所伝の方が古いとされている。³

この記事は、東海道と東山道を区別していないが、「東の方十二道」は東海道と東山道の諸国を含むものと考えられる。

しかし、ここに引用した『古事記』・『日本書紀』の記事は、いずれも東国諸國に関する記述であって、東國への経路（道筋）を記したものではない。

大和から東国への道については、『古事記』が小碓命（倭建命）の東征の記事に、

伊勢・尾張・相模（武）・（上総）・蝦夷・（武藏）・

〈足柄の坂本〉・甲斐・科野・（科野坂）・（美濃）・尾張

の順に道筋を記している。

また、『日本書紀』は、日本武尊の東征記事の景行天皇40年の条に、

伊勢・駿河・相模・上総・陸奥・甲斐・武藏・上野・

〈碓日坂〉・信濃・〈信濃坂〉・美濃・尾張

の経路が記されている。

この「記・紀」の記事は、国名や地名に和銅6（713）年の好字制前後の異なる文字を用いているが、その内容はいずれも後世の資料によって補ったものと考えられ、そのまま史実とはいえない。また、『日本書紀』は、日本武尊が東征の途中で、

「唯信濃國・越國のみ、頗未だ化に從はず。」

と曰ったと記し、日本武尊は信濃計略のために、武藏国から上野国を経て碓日坂に至り、自らは信濃に向い、越後には吉備武彦を遣したと記されている。これは大和の王權の支配が、信濃国と越後国に十分及んでいなかったことを伝えるものである。

また、この記事には、日本武尊が、碓日坂に至って碓日嶺に登り、弟橘姫を憐んで「吾姫はや」と曰ったという有名な話が載っている。この碓日坂は、一般には入山峠、または碓氷峠と考えられている。そして、この伝承を残す地名は、群馬県吾妻町、あるいは姫恋村といわれ、入山峠や碓氷峠からはかなり離れた位置にある。

そこで『日本書紀』の伝承と関係して碓氷峠附近を検証すると、注目される巨石が群馬県群馬郡倉渢村鳴石にある。この石は鳴石と呼ばれ、長径約6m、短径約4mの自然石の下石の上に巨石が重なり、いまも村人は注連縄を張って鳴石を祀っている。

この巨石は、蓼科山麓の鳴石と名称ばかりでなく、東に榛名富士を望む立地条件、巨石の形状もよく似ている。その出来と性格については、今後の研究に待ちたい。

また、『日本書紀』景行天皇55年春2月の条に、

「彦狹嶋王を以て、東山道の十五国¹の都督に挙げたまふ。是豊城命の孫なり。然して春日の穴²咲邑に到りて、病に臥して薨りぬ。是の時に、東國の百姓、其の王の至らざることを悲びて、稱に王の尸を盗みて、上野国に葬りまつる。」

とある。春日の穴咲邑は、望月町春日ともいわれ、望月町協和比川井の諏訪神社社殿の東側の森の中に彦狹嶋王の墓といわれる王塚古墳がある。

しかし、春日の穴咲邑は、尾張・美濃・上野・武藏にもあり、『日本書紀』は彦狹嶋王を「上野国に葬り」と記し、群馬県總社にも王の墓と伝えられる古墳がある。この記事は、直ちに史実を伝えるものとはいえない。しかし、大和の王權が、東國の支配に利用した古東山道の道筋を考察する上では、大変参考になり、且つ重要である。

古東山道は、『古事記』『日本書紀』の記事に記された経路と滑石製模造品などの祭祀遺物の出土地を結べば、およその道筋を知ることができる。すなわち、祭祀遺物の出土地と『古事記』『日本書紀』の記事よりみた信濃の古東山道は、上野から碓臼坂（入山峠）を越えて信濃に入り、瓜生坂（望月町）・雨境峠（立科町）を越えて科野坂（神坂峠）から美濃に入る道筋がそれである。

注

1 宮坂英丈・宮坂虎次『蓼科』 尖石考古館 昭和41年

2 『萬葉集三』（日本古典文学大系6） 岩波書店 昭和35年

卷14 3399 「信濃道は今のは廻道刈株に足跡しまむな履着けわが背」の歌の信濃道を信濃へ行く道と解し、「[続日本紀] 和銅6年7月、

「美濃信濃二国の境、往道険隘にして往還艱難なり、仍て吉蘇路を通す。」とあり、大宝2年（702）から12年かかって開通した」としている。

しかし、当時吉蘇路は美濃國に属し、信濃道ではない。このとき新たに開かれた信濃道は、松本平から上田盆地に通ずる保福寺峠辺りの堅道と考えられる。

3 『日本書紀上』（日本古典文学大系67） 岩波書店 昭和42年

4 『古事記祝詞』（日本古典文学大系1） 岩波書店 昭和33年

5 直木孝次郎「東国への道」「日本古代国家の成立」P164 古川弘文館 1987年

6 望月町誌編纂委員会『望月町誌 第三卷』P190 望月町誌刊行会 1994年

7 藤沢平治「中山道瓜生坂祭祀遺跡」「信濃」第19卷第4号 昭和42年

2 蓼科山麓の堅道と草原の道

大和の王權の東國支配は、稻荷山古墳出土の鉄劍銘文に、

「辛亥の年七月中記す ヲワケの臣 上つ祖名はオホヒコ （以下六代略）

世々杖刀人の首として奉え奉り来り今に至る

ワカタケル大王の寺シキの宮に在る時

吾天下を佐け治む 此の百鍊の利刃を作らしめ 吾が事え奉る根原を記すなり」

とあり、雅加多支齒（ワカタケル）大王、すなわち雄略天皇の辛亥（471）年に、武藏の乎獲居（ヲワケ）が秋刀人の首として大王に仕えていたことが記されている。

杖刀人は、武人または武官として大和の王権に仕えた人であり、乎獲居（ヲワケ）はその首である。これに対して、熊本県江田船山古墳出土の大刀銘文には、

「典賣人として事え奉り」

と記されている。典賣人は、文官あるいは行政事務を司った人と考えられている。

この二つの銘文は、雄略天皇の辛亥年以前に、大和の王権の支配が、武藏国から熊国の辺りまで及んでいたことを示唆している。

³更埴市森将軍塚古墳は、大和の王権が支配権を承認する印として与えたといわれる三角縁神獣鏡などが出土している。この古墳は、広大な蔵光寺平を見下ろす更埴市森の尾根にあり、松本平の中山丘陵北端にある弘法山古墳、長野市篠ノ井石川の山頂にある川柳将軍塚古墳とともに、4世紀後半ころの築造と考えられている。従って、大和の王権による信濃の支配は、4世紀後半ころにはすでに確立していたことになり、信濃経営の道も、このころまでには開かれていなければならぬ。

古東山道は、鳴石・勾玉原・赤沼平・鳴石原・鍵引石などの祭祀遺跡が、6～7世紀ごろに比定され、この祭祀遺跡と蕨手刀出土地を点とすれば、その点と点を結んだ線の附近に道筋があったことになる。勾玉原遺跡と赤沼平遺跡は、佐久・小県両郡境の尾根にはほぼ一直線に並び（図3・31）、この線を北東に延長すると鳴石遺跡があり、西南の延長線上には、昭和30年5月に蕨手刀（東京国立博物館蔵）を出土した猿小屋地籍がある。

平成6年夏の調査で、土師器片を検出した箕輪平は、猿小屋地籍から急坂を南西に下って、薬研ノ沢を越えたところに広がる緩斜面に位置している。児玉町農武氏は、昭和28（1953）年に、この箕輪平の近くの削橋で、土師器の破片と元祐通宝を採集したと報告している。

鳴石遺跡から箕輪平までの祭祀遺跡と蕨手刀出土地は、地形的に僅かな曲折があるにしても、郡境の尾根とその延長線上の緩斜面に、ほぼ一直線に並んでいる。

この郡境の尾根道は、勾玉原遺跡と赤沼平の間に湿地があり、女神湖西岸の北東に続く丘陵の斜面もかなりの急な坂である。また、猿小屋地籍北東方の斜面は、かなり険しい急坂で、薬研ノ沢に下る道も、距離は短いが見通しの悪い急坂の難所である。

箕輪平から白樺湖畔への道は、南東に向って本沢を渡り、そこから三本松の頂上を目指してのぼると、その先に池ノ平の平原が広がっている。この斜面の傾斜は緩く、最近まで白樺湖への近道とし幾筋かの山道が利用されていた。

池の平遺跡は、白樺湖畔の北西岸に位置し、御座岩岩陰遺跡は、南東の岸に奇怪な巨岩を湖面に映している。

古東山道と
推定される佐
久・小笠両郡
境の尾根道は、
鳴石・勾玉原
遺跡などから
出土した須恵
器や土師器の
年代から推定
して、6～7
世紀初頭ころ

にはすでに開

かれていたものと考えられる。

鳴石遺跡と鳴石原遺跡は、蓼科山麓の広大な北西斜面に位置し、つつじヶ丘の小円頂丘を越えると南西斜面の裾部に鍛引石遺跡がある。

これらの遺跡は、蓼科山の北西山麓の斜面にはば一直線に分布し、その延長線上に昭和18年に歿手刀を発見した女神湖東岸、昭和39年大門石の採石中に歿手刀を出土した筑波大学附属高校桐陰寮の上（二松学舎寮の前）がある。

ここからの道筋は、およそ等高線に沿って、蓼科山麓を南西に進み、幾筋もの深い谷が続く本沢の手前で右に折れ、沢の右岸を谷に沿って西方に下り、箕輪平に出て、この付近で尾根の道と合流し、本沢を渡って三本松へ上り、白樺湖畔の池ノ平遺跡・御座岩岩陰遺跡に向う道筋が考えられる。

この道筋は、比較的平坦な道で、距離はやや遠くなるが、ほとんど難所らしいところはなく、草原の道ともいるべき道筋である。

注

- 埼玉県教育委員会『稻荷山古墳出土鉄劍金象嵌銘板』 1979年
- 直木孝次郎『三つの銘文と日本古代史』『日本古代国家の成立』 P216 吉川弘文館 1987年
- 森将军塚古墳発掘調査団『史跡 森将军塚古墳』更埴市教育委員会 1992年
- 斎藤忠『弘法山古墳』 松本市教育委員会 昭和53年
- 宮下健司『長野県川柳将军塚古墳をめぐる古文献』『信濃』 第31巻第9号 昭和54年
- 宮坂英丈・児玉司農武・宮坂虎次『長野県大門峠削橋遺跡発掘調査報告』
『考古学雑誌』51-1 昭和40年



写真53 赤沼平附近の郡境の尾根（女神湖から望む）

3 諏方山の嶺道

『令集解』卷二二「考課令・殊功異行」の条に、

「古記云、殊功、謂笠大夫作伎蘇道、增封戸、須芳郡主帳作須芳山嶺道、授正八位之類也」とある。

『令集解』が引用する「古記」は、大平10(738)年ころの成立とされているので、須芳郡の主帳が「須芳山の嶺道」を作ったのは、大宝2(702)年に開かれた「伎蘇道」とは同じころと考えられる。

一志茂樹氏は、雑誌『信濃』(第5巻第7号)に、

この『令集解』の「考課令・殊功異行」の記事を考証して、

「明らかに〈須芳山の嶺の道〉とある以上、峠といふより山の嶺づきを過ぎて他地方に通ずる道を開いたといふことである。」

と述べ、この道を令制以前の古道、すなわち、古東山道と考え、兩境峠に向う道筋を「役ノ行者越」と推考している。

「役の行者越え」は、本沢を越えて白樺湖へ向う道であり、現在の県道より少し高い位置を通りていたといわれる。「役の行者」と呼ばれる地籍の位置は、宝曆4(1754)年の小諸藩土稲垣市右衛門の「立科山覚附」に、

一、是より雨降り霧深く、漸く芦田山と諏方境のわれ橋え出る。

一、右われ橋は、深沢と一乗七ヶ年に一度つ、懸候由、尤其度々頼三俵つ、之を下され、申ノ年、寅ノ年に当る。是は諏訪之御柱之也。

一、右橋より音なし川一此川は諏訪之方へ流れ一を右に付け、坂越より大門村之方え海道四五町上り、右之方に役之行者御座之岩二つ有り。夫より一町程行く、左は大門道、右は芦田道に入る。この道より右の方廿町四方程之原也。此原を役之行者といふ。

とある。役の行者越えの道は、この原を通る道で、開設の時期は明らかでないが、武田氏関係の史料にも「役の行者道」の通行が記されている。

「役の行者」の原と箕輪平の間にある本沢は、夢科山麓の道筋の中でも、最大の難所であり、途中の深沢橋は、大雨などによってたびたび流されている。

この「役の行者道」は、地形的にみても「峠といふより山の嶺づきを過ぎて他地方に通ずる道」とは言い難い。「古記」にいう「須芳山の嶺道」は、郡境の尾根の道と考えるべきであろう。

須芳郡の主帳が、8世紀初頭に作ったとされる「須芳山の嶺道」は、必ずしも明確ではないが、「嶺道」とあるので、大門峠以南の諏訪郡の嶺道、あるいは諏訪の人たちが諏訪分と考えていた佐久・小県両郡境を通る尾根の道のことと考えられる。

この「嶺道」の検証には、まず次の2点が前提条件になる。

- ① 嶺道は、諏訪の都司が作った道であり、諏訪郡内に作られた嶺道と考えられる。
- ② 佐久・小県両郡境の尾根道には、勾玉原・赤沼平（女神湖西岸）遺跡があり、いずれも6～7世紀初頭の造物を出土し、特に、赤沼平（女神湖西岸）遺跡は、出土遺物が少ないので断言はできないが、さらに測る可能性がある。

従って、勾玉原・赤沼平遺跡を通る古道は、「諏訪山の嶺道」が作られる以前に開かれていたものと考えられる。これらの調査結果から8世紀初頭に作られた諏訪山の嶺道は、赤沼平の南端から大門峠、あるいは大門峠以南の諏訪の尾根道と考えられる。

古代の諏訪郡の範囲は明らかでないが、諏訪郡は『和名類聚抄』に、
上武（刊本 土無）・佐補（刊本 左布）・美和・桑原（刊本 久波波良）
神戸（高山本なし）・山鹿（高山寺本 也万如・刊本 也末加）
返良（高山本・刊本 旦良）・神戸

など7郷が記されている。この7郷の中で佐久郡との郡境に位置するのは、山鹿郷である。山鹿郷は、『茅野市史』に、

「八ヶ岳・蓼科山麓一帯のいわゆる山浦地方で、ヤマガと呼ばれる地方である。いまでは原村・泉野地区にまでわたって集落が発達しているが、当時は未開発地で広い原野が多く諏訪明神の狩猟地であった。」

とある。古代の佐久・諏訪両郡の郡境は、山林原野で明確な標識もなく、従って、この郡境をめぐって近世に至るまで山境論が繰り返されている。延宝5（1677）年9月25日に幕府評定所が裁定した「立科山小諸・高島領出入裁許状」によると、諏訪領の鍋ヶ原村など9ヶ村では、境界を「さいの河原」と申し立て、小諸領芦田8ヶ村では、現在の郡境とは同じ「屋しが山（八子ヶ峰）」附近を境界と主張した。

幕府評定所の裁許は、塩沢村と八重原村が麦草から用水堰を開いており、深沢川の橋を芦田8ヶ村が懸けていること、蓼科山の神を祀る神主が芦田村に住んでいることなどを理由に、芦田8ヶ村が主張した境界を諏訪・小諸領の境と認めていた。

このように諏訪では、諏訪・佐久両郡の境界を伝統的に賽ノ河原（雨城峠）附近としていたと考



写真54 莓研ノ沢附近の古道

えられる。この推理が正しければ、8世紀初頭に作られた「東方山の塙道」は、大門峠以北の尾根道だとすれば、大門峠附近から賽ノ河原、あるいは赤沼平南端附近までの郡境の尾根道ということになる。また、大門峠以南の尾根道だとすれば、諏訪郡内の尾根道ということになり、今後の調査研究の成果に期待したい。

諏訪山の嶺道が、大門峠以北の場合、8世紀以前の郡境の尾根道は、鳴石遺跡→勾玉原遺跡→赤沼平（女神湖西岸）遺跡を通って、そこで郡境から離れて、筑波大学附属高校桐陰寮の南東方向に道筋をとったことになる。この道筋は、やや距離は長くなるが、多数の人馬とともに東征軍団の移動のためには平坦な道筋である。

これに対して郡境の赤沼平から猿小屋への道筋は、地形的にもきわめて厳しい急坂を通らなければならぬ。従って、当初の古道は、困難な道筋を避けて、平坦な道筋を選んだ可能性はある。しかし、この道筋を選ぶとすれば、当初から前述のいわゆる草原の道を通ったであろう。

諏訪山の嶺道が、大門峠以北の尾根道とすれば、赤沼平南端から猿久保→薬研ノ沢→箕輪平→池ノ平の道を作ったことになる。この道筋は、距離的にかなり短縮されるが、前述のとおり赤沼平から薬研ノ沢に至る道筋がかなり厳しい急坂である。また、猿久保→薬研ノ沢→箕輪平の古道は、薬研ノ沢から先が少し郡境から離れた道筋になる。そのまま郡境の尾根を通ったとすれば、薬研ノ沢→割橋附近→大門峠の道筋になる。

しかし、この道筋は、実地踏査によって古道の痕跡や現状を確認したが、かなり険しい坂道で、本沢の谷も深く、軍団の移動や人馬の通行は困難と思われる。この道筋については、発掘調査による検証をしていないので、今後の調査研究に待ちたい。

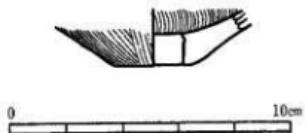


図30 箕輪平出土遺物実測図

箕輪平→三本松→池ノ平の道筋は、8世紀以降も地方道（伝路）としてかなり利用されていたことは疑いない。しかし、池ノ平遺跡出土の遺物には、8世紀以前に比定される遺物も含まれているので、この遺跡に関係する古道が、8世紀以後に開かれたと断言することはできない。

また、箕輪平出土の土師器は、8世紀に比定される遺物である。そして、池ノ平遺跡の出土遺物には、8世紀以降に比定される内黒の土師器などを含み、劍形、有孔円板などの祭祀遺物も、劍・鏡を模造したと考えられる本米の形態が失われている形式がみられるに注意したい（図17-18-20）。従って、箕輪平→三本松→池ノ平の道筋は、8世紀以後も地方道（伝路）としてかなり利用されていたことは疑いない。しかし、池ノ平遺跡出土の遺物には、8世紀以前に比定される遺物も含まれているので、この遺跡に関係する古道が、8世紀以後に開かれたと断言することはできない。

注

- 1 国史大辞典編集委員会「古記」「国史大辞典5」P596 吉川弘文館 昭和60年
- 2 一志茂樹氏「我が國中部山地上代交通路の性格（承前）」
『信濃』第5巻第7号 P25~27 昭和28年
- 3 稲垣市右衛門「立科山覚附」「長野県史 近世史料編」第2巻(2) P56

- 東信地方 長野県史刊行会 昭和54年
4 池邊彌『和名類聚抄郷名考證増訂版』P362 吉川弘文館 昭和45年
5 「茅野市史 上巻」P870 茅野市 昭和61年
6 長野県「立科山小諸・高島領出入裁許状」『長野県史近世史料編』
第2巻-2 P43~44 長野県史刊行会

4 蓼科山麓の古道の調査

雨境峠祭祀遺跡群と蓼科山麓の古道の調査は、平成3年に文献による基礎調査、および現地の踏査を行って基本計画を策定し、平成4年から町誌編纂事業とも関連し、町の単独事業として調査に着手した。

蓼科山麓には、古東山道と関係する祭祀遺跡とともに、鎌倉時代後期後半ころから室町時代初期に築かれた石塚（ケルン）と古道、戦国時代の信玄の上の棒道、六川源五右衛門が明治30年ころから古道を改修して開いた六川新道などがある。

発掘調査は、まず、これら各時代の古道を調査し、道幅や構造上の特徴、地形や位置による変化を把握して、その調査資料による古道の時代的位置づけを試みた。調査地点は、地形図上で遺跡の位置関係を把握し、現地踏査と検土杖によるボーリング調査によって地層と硬度の変化を調べ、さらに、大起製貫入式土壤硬度計を用いて精査し、4年間にわたり20地点を選定して発掘調査を実施した（図31）。

この比較研究のデータによれば、祭祀遺跡を結ぶ推定古東山道は、両側の溝心心間の幅がおよそ380~430cm、路面は灰褐色を呈し、土間のタタキ状に硬く、硬度は10~25を測り、幅員がおよそ350~380cmであった。

一志茂樹氏は、蓼科山麓の古道について、雑誌「信濃」にて、「須芳山の嶺の道は、征夷路線としての性格をになって重視されて來たものである。」と述べ、大和の王權が東國計略のために用いた軍用道路とし

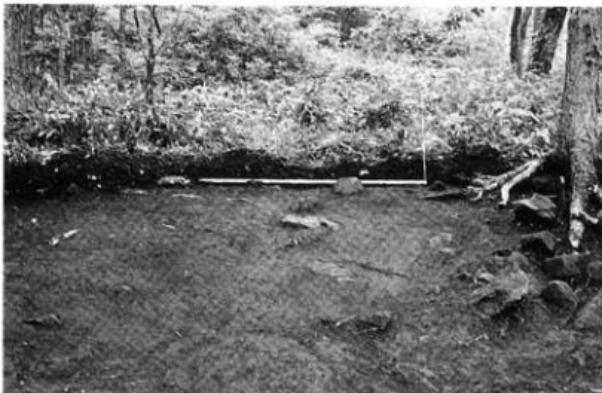


写真55 健引II地点の推定古東山道

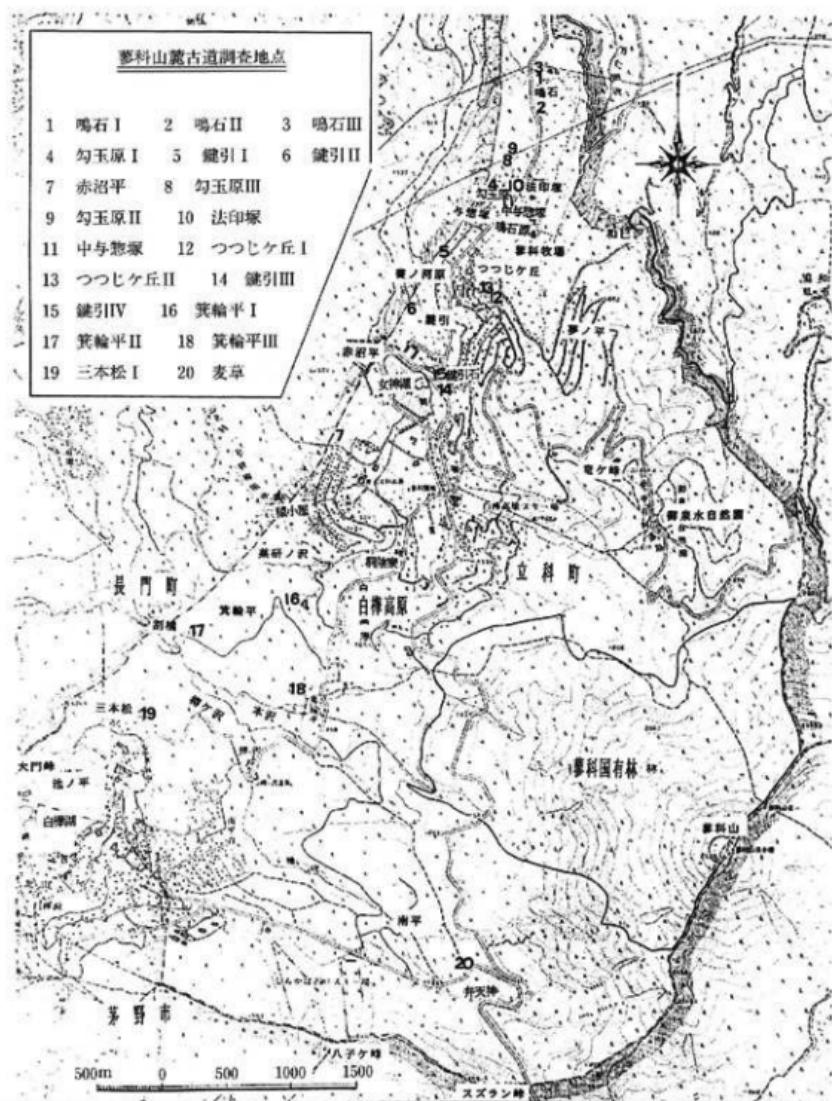


図31 雨境の祭祀遺跡群と古道調査地点

ている。この古道が、征夷路線としての軍用道路であったとすれば、当然軍の移動のためにはかなりの道幅が必要になる。

古東山道推定路の構造は、尾根では谷側に側溝を掘り、山側に土留めと考えられる大きな角石を配している例があり、平坦地では両側に側溝を掘り、低湿地では、谷側の側溝に石組を設けている例もみられた。この古道の構造は、開設当初からこのように整備されたものではなく、後代に次第に補修し、改修されたものであろう。

中世の道は、路面の幅がおよそ180~250cmを測り、硬度は10~20前後で硬く締り、湿地などを例外として、黒色土を掘り窪めただけの簡単な構造であった。六川新道は、計画書には幅3間あるが、道の両側に落葉松の並木が植えられ、側溝はなく、並木間の道幅は2m前後で、路面に砂礫が僅かに敷かれていた。

(I) 鳴石地区の調査 (図31-1~3)

鳴石地区では、平成4年6月に蓼科第2牧場の柵の脇で、林道の改修工事が行われることになり、この工事に関連して、鳴石Ⅰ・Ⅱ地点の緊急調査を実施した。

鳴石Ⅰ(1)は、鳴石遺跡の北西端附近で、地下30cmほどの深さから溝心心間の幅が432.5cm、路面の幅がおよそ390cmを測り、きわめて硬く灰褐色を呈し、側溝は東側が幅45cm、深さ23cm、西側が幅約20cm、深さ10cmを測る。

鳴石Ⅱ(2)は、鳴石遺跡の南方約130mの地点である。構造は鳴石Ⅰ地点の造構と類似し、両側に側溝があり、溝心心間の幅が約400cm、路面の幅が360cmを測り、牧場の柵と林道の中間点を東南東方向に走っている。從って、この線をそのまま延長すると、つつじヶ丘別荘地のある小円頂丘の東肩に向うことになる。しかし、古道は平成6年の調査の結果、途中でやや西に折れて中与惣塚附近をとおり、小円頂丘を頂上附近で越えていることがわかった。

鳴石Ⅲ(3)は、鳴石遺跡の北方約200mに位置し、緩い北西斜面で、近くに湧水があり、雨季



写真56 鳴石Ⅲ地点の古道

深さ cm	0	W					E
		1.0	2.0	3.0	4.0	5.0	
2.5	2.0	3.0	1.5	1.5	1.5	3.0	
5.0	2.0	4.0	2.0	1.5	2.0	5.0	
7.5	3.0	5.0	3.5	4.0	3.5	5.0	
10.0	7.0	5.5	5.5	5.0	5.5	6.0	
12.5	7.0	8.0	6.0	6.0	6.0	6.0	
15.0	7.0	8.0	8.8	7.0	8.8	7.2	
17.5	7.0	9.0	11.0	9.0	11.0	8.0	
20.0	7.0	9.0	13.5	9.0	13.5	8.0	
22.5	7.0	9.0	16.0	14.5	16.0	8.0	
25.0	7.0	7.5	16.5	14.5	16.5	9.2	
27.5	7.0	9.5	18.0	16.0	18.0	9.2	
30.0	7.0	15.0	20.0	16.0	20.0	13.0	
32.5	7.0	18.0		17.0		12.0	
35.0	7.0	20.0				13.0	

表15 鳴石III地点北方の古道の硬度

幅広くつくられていた。古道の西路肩は、黄褐色の粘土層を残しているが、東路肩は褐色土で硬く固め、路面の下層も大小の礫を入れ、その上に褐色土が踏み固められて、土間のたたきのように硬く締っていた。

道幅は溝心心間がおよそ600cm、路面部分が365cmで、西側の約100cm、東側の約120cmは路肩となり、道路として利用された形跡はない。この構造と規模は、湧水地点に近いという位置と地形的条件のために、幾度か改修された結果であろう。

古道は、地表から30~50cmの下層から検出されているが、この遺構の規模と構造を基準にして時代的考証をすることは困難であり、この地区の古道を総合的に把握し、判断して推考することが必要と考えられる。

表15は、鳴石III地点の北方約30mで計測した路面の硬度と幅員である。この地点では明らかに側溝心心間の幅は400cm前後、路面の幅がおよそ360cmで、硬度が11~20である。因みに、この地点は、鳴石III地点の湿地から離れた場所である。

また、前述のとおり鳴石遺跡では、溝心心間の幅が380~400cm、路面の幅が340~350cmを測り、鳴石I・II地点、および鳴石IIIの北方地点の遺構と構造、規模などが類似している。

(2) 勾玉原地区の調査(図31-4)

勾玉原I(4)は、丘陵上に位置する勾玉原遺跡の北方に隣接する地点にあり、道筋はほぼ都境沿いに赤沼平遺跡の方向に続いている。古道の東山側には、土留めのために置かれたと考えられる大きな角礫が列状に並び、西谷側には簡単な溝状遺構が検出された。側石・溝心心間の幅は345cmで、路面は硬く上間のたたき状に硬く縮り、幅員がおよそ300cmを測る(写真57)。

平成5年の調査では、硬度計を使用しなかったが、隣接する勾玉原遺跡のD3グリッド杭(図13・表16)、及びD6グリッド杭(図13・表17)を起点として東側の古道推定位置で計測した硬度は、D

などには湿地になったといわれる場所である。この地点の発掘調査は、町の単独事業で平成4年7~8月にわたって実施した。

古道は両側に深い側溝があり、西谷側の側溝が幅約65cm、深さ35~60cmほどのU字形に掘込み、両端と底部に角礫や平石を配していた。東山側の側溝は、幅約100cm、深さおよそ25cmを測り、附近から流れ出す湧水を逃がすために



写真57 勾玉原Ⅰ地点の古道

3グリッドの0.5m附近から3.0m附近が10~19を示し、礫石があつて計測値を把握できない部分もあるが、古道の路面と推定される。また、D 6グリッドの1.0m附近から4.0m附近でも計測値は10~19.3を示している。この位置の計測は、

深さ cm	W → E						
	0	0.5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0
2.5	4.0	2.5	4.0	4.8	6.0	7.5	6.0
5.0	4.0	2.1	5.7	4.8	6.0	8.0	7.0
7.5	4.0	4.5	5.7	4.8	9.3	9.0	10.0
10.0	4.0	6.0	5.7	8.0	10.0	Ston	10.0
12.5	6.0	10.0	10.0	8.0	11.0		12.0
15.0	6.0	12.5	11.0	Ston	13.5		12.5
17.5	6.3	Ston	11.0		14.0		12.5
20.0	7.0		Ston		14.0		12.5
22.5	7.0				17.0		12.5
25.0	Ston				19.0		12.5

表16 D 3グリッドを起点とする地点の硬度

50cm位置での計測をしていないが、3地点と9地点を総合すると、0.5m附近から4.0m附近が古道部分と推定される。遺跡内では、古道推定地点と周囲との計測値の差が比較的小小さく、周辺部分の計測値が大きい。これは鳴石遺跡の場合と同様に、路面以外にも祭祀に関係して多くの人の移動があり、広い範囲で踏み固められているためと考えられる。

勾玉原遺跡の古道推定地点では、路面部分を精査したが、側溝は確認されなかったので、南北

深さ cm	W → E			
	0	1.0	2.0	3.0
2.5	8.0	13.5	13.5	4.5
5.0	8.0	13.5	13.0	5.5
7.5	9.0	19.3	14.0	7.0
10.0	9.5	18.0	16.0	Ston
				10.0

表17 D 6グリッドを起点とする地点の硬度



写真58 勾玉原遺跡東トレンチ下層の礫

(3) 鍵引地区の調査 (図31-5・6・14・15)

鍵引I地点(5)は、勾玉原遺跡の南方、賽ノ河原の西方に位置し、賽ノ河原から続く礫層が一帯を覆っている。従って、古道は部分的に平石が残っているが、礫を除去して路面をつくり、両側に簡単な側溝が認められた。溝心心間の幅はおよそ400cm、路面の幅はおよそ360cmを測る(図32)。

鍵引II地点(6)は、赤沼平遺跡(女神湖西岸)と標高1,575mの丘陵を間にした北側据部に位置し、鳴石III地点と同様に、湿地に隣接する立地条件にある。古道は湿地のある北西の谷側に幅60cm、深さ35cmほどの側溝をつくり、溝の壁面に角礫を用いている。南東の山側は、幅50cm、深さ32cmほどの側溝があり、路面は緩傾斜の上り坂になり、溝心心間の幅が435cm、路面の幅がおよそ380cmを測る(図34)。

この地点は、中世以降山見以外にはほとんど利用することがなく、従って古道面の地層はきわめて単純で、熊糞を主体とする芝草の根を含む20~25cmほどの表土層の下層は、路面と推定される灰褐色の硬い地層で、その下の層は安山岩礫の混じる黄褐色の地山に続いていた。

この地点は平成5年に発掘調査を実施し、表土層のおよそ20cmを削上してあり、硬度は直ちに路面部分の計測値10~25を測り、きわめて硬く、黒光さえ感ずるほどの状態であった(表18・図33)。

鍵引III地点(14)は、鍵引石遺跡の範囲、および古道跡の検出を目的として設定したトレンチであり、塩沢堰を挟んで西側に緩く傾斜面に位置する。

地層は約20cmほどの表土層(黒色土層)の下層(2層)に、塩沢堰の堰堤が崩落し、これを補修したとみられる20~30cmほどの黒色土と黄褐色粘土・砂礫の混合土層があり、その下層に堰の崩

壊端にトレンチを設定してさらに追究した。この結果古道路面の下層には、大小の礫が一面に認められ(写真58)、上層の地層も灰褐色土と黒色土、黄褐色土の混合した地層が複雑に複合していた(図13地層断面図)。

この地点は、勾玉原遺跡内に位置し、微地形は僅かに北側に緩く傾斜しているが、泥流層のため排水がよくない。

従って、祭祀遺跡内の特別な地域に位置するので、排水、あるいは路盤を固めるために、下層部分に何等かの工事を行っている可能性がうかがわれる。

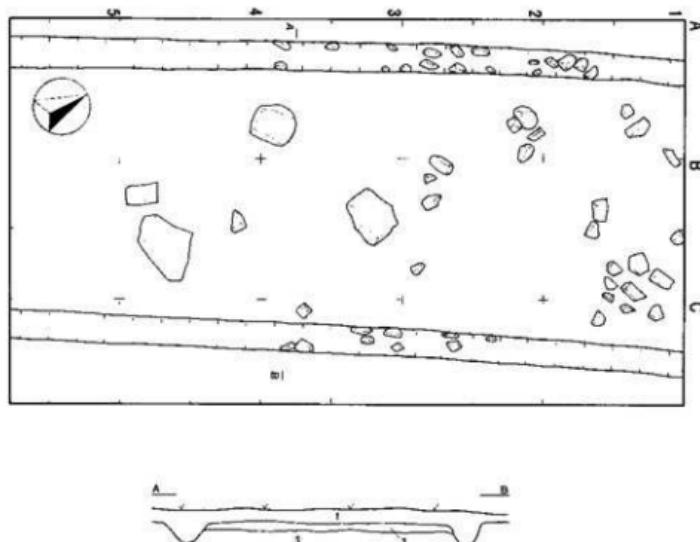


図32 鍵引I地点の古道推定地実測図

落層とみられる10cmほどの
砾を多く含む層(3層)、10
cmほどの砂砾を多く含む層
(4層)があり、さらに35cm
ほどの砾を多く含む層(5
層)が認められ、その下層に
第1層と同じ20~25cmほど
の黒色土層があり、地山の
黄褐色粘土層が続いていた。

(表上約20cmを削土 2.5+20cm)

深さ cm	SE					NW	
	0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0	
2.5	7.5			14.0	10.5	6.0	
5.0	7.5			25.0	25.0	10.0	
7.5	16.0						
10.0	19.0		7.5				Ston
12.5		7.5					8.0
15.0		7.5					9.5
17.5		9.0					16.0

表18 鍵引II地点の路面の硬度

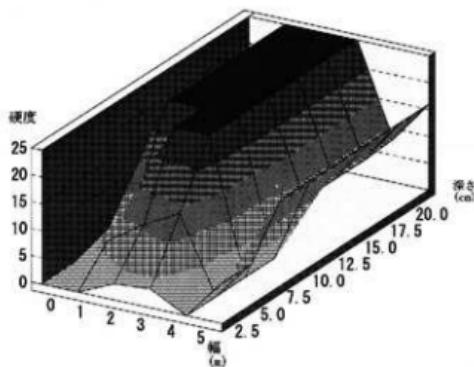


図33 鍵引II地点の路面の硬度図

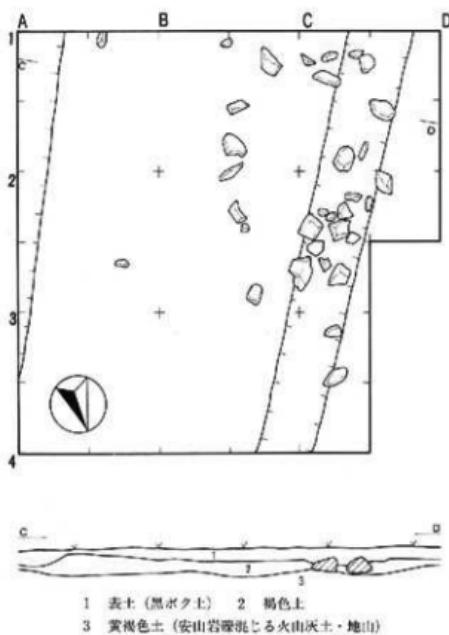


図34 鍵引II地点実測図

従って、塩沢堰は当初表上層に土盛りをして堰道を開き、その堰底が第5層と推定される。塩沢堰は、その後少なくとも2回にわたって堰堤が崩落し、補修されていることが地層の変化からうかがわれる。

この地点での鍵引石遺跡の範囲と古道の追究は、塩沢堰の開削と幾度かの崩落、改修工事などの繰返しの状況からみて調査が困難と考える。また、出土遺物などは、全く検出されていない。

鍵引IV地点(15)は、鍵引石の北西方およそ50mに位置し、六川源五右衛門が明治30年ころから古道を改修して開発をはじめたと伝えられる六川新道の附近である。このトレンチは、六川新道の落葉松の並木附近を選び、六川新道と古道の関係、および赤沼平遺跡附近を通る尾根の嶺道と鍵引石遺跡附近を通るいわゆる草原の道とを連絡する古道が存在するか否かの確認を目的に設定して調査した。

しかし、この地点も近くを通る塩沢堰の開削、および改修、最近のホテルの建設工事などによって地層が変化し、有意の資料を得ることができなかった。

(4) つつじヶ丘地区の調査 (図31-12, 13)

つつじヶ丘 I (12) は、賽ノ河原の東方およそ250mにある標高1,620.1mの小円頂丘の東肩に位置し、調査地点より西側、すなわち頂上附近より西側は、現在別荘地として開発されている。小円頂丘の東肩は、鳴石遺跡・鳴石原遺跡を結ぶ古道の延長線を想定した地点で、階段状の地形が認められ、頂上から20mほど東寄りに下ったところに道跡らしい2筋の痕跡を認めたので、各段の幅はやや狭いが、この地点を選んでトレンチを設定して調査した。

しかし、2地点の地層は、表土層の下層にやや硬い面を認めたが、路面と推定できるほどの変化はなく、他の地点で見られるような特徴も希薄であった。地層は15cmほどの表土層の下層に、扁平な小礫を多く含む10cmほどの明るい褐色土層があり、その下層は直ちに火山礫を含む黄褐色粘土層（地山）に続いていた。

従って、この2地点の状況は、新しい時期に通行した可能性はあるが、古道の路面と推定できる幅員と硬度を認めることはできなかった。

つつじヶ丘 II は (13)、つつじヶ丘 I 地点の調査結果によって、小円頂丘頂上やや西寄りに急進追加設定して調査した地点である。表土層は I 地点と同様であるが、その下層に硬度10~20ほどの硬い灰褐色土層を認め、幅員はおよそ360cmと推定される。しかし、この地点は、別荘地内であるため本格的調査はできなかった。

鳴石遺跡の溝状構心心線より推定した古道の道筋は、走行方位が S-10-E で、小円頂丘の東肩附近に向っている。この場合は、中与惣塚の東方およそ40~50m附近を通ることになる。しかし、中与惣塚北方20m附近的調査結果では、古道が中与惣塚の際を通っているものと推定された。従って、古道は、つつじヶ丘の小円頂丘が見える地点附近で西寄りに道筋を変え、つつじヶ丘の頂上附近を通り、鎌引石に通じていたものと考えることができる。

(5) 赤沼平地区の調査 (図31-7)

赤沼平の調査地点は、赤沼平遺跡から南西に向って、平坦面から猿小屋に下る直前の地点を選んでトレンチを設定した。地形的には勾平坦 I 地点と傾斜面の向きが逆になるが、立地条件はきわめてよく似ている。

女神湖畔から南北の地には、国定公園内に入るため、野生植物の保護には十分留意し、つつじ・白樺などの樹木がある地点をできるだけ避け、さらに、トレンチがこれらの樹木にかかる場合は、トレンチの拡張を断念して調査を実施した。

この地点の古道は、西の山側に幅30cm、深さ20cmほどの側溝を掘り、その端に角礫を列状に置き(図版V左下)、東の谷側にもほぼ同規模の幅30cm、深さ20cmほどの側溝をつくり、溝心間の幅が390cm、路面の幅が350cmを測る。

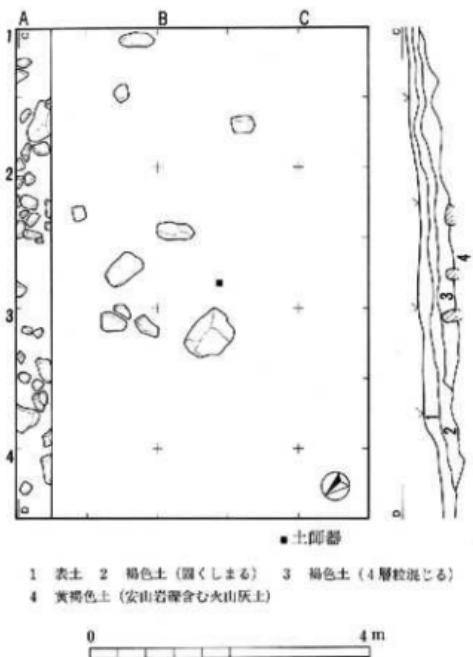


図35 箕輪平II地点実測図

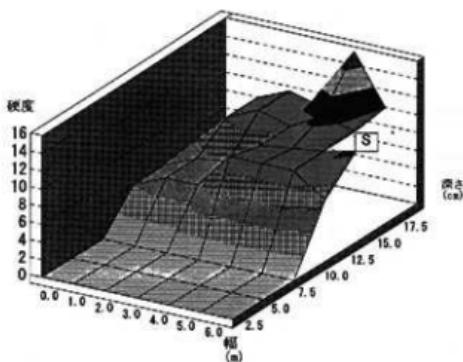


図36 箕輪平II地点の硬度図

路面は25cmほどの表土層（黒色土）の下層から検出され、灰褐色を呈し、きわめて硬く、厚さは15cmほどであった。

(6) 箕輪平地区の調査 (図31-16・17・18)

箕輪平I(16)は、蕨手刀を出土した筑波大学附属高等学校桐陰寮附近から最近まで三本松・白樺湖方向に向う山道があり、いわゆる草原の道から池ノ平遺跡・御座岩岩陰遺跡方面に向う最短距離の中間点に位置している。調査地点は、山道附近から直角にトレンチを設定して追究し、山道と思われる痕跡、焼土なども検出されたが、古道と推定される遺跡は全く認められなかった。

箕輪平II(17)は、赤沼平遺跡と蕨手刀出土地の猿小屋を結んだ線の延長線上に古道を推定し、主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線から本沢を越えて割橋に向う林道の北側に調査地点を設定した。

この地点の決定は、まず地図上で位置を求め、再三現地を踏査して古道の痕跡を探査し、地点を選定した。その結果、本沢に下るカーブのおよそ50m東方の位置に、その推定地点があることが確認されたので、ここに20m余のトレンチを設定して調査した。

調査地点は、およそ20cmの表土

層の下層に灰褐色の硬く締った地層を認め、精査したところ調査地点B 2附近から8世紀ごろと推定される土器が出土し、この附近が遺跡の一部であることが判明した（図35）。

このことは硬度計による調査でも、灰褐色土層上層の硬度が5.5～9.5の高い計測値を示していることからも、かなり踏み固められ、この附近がバージンの山地の地層でないことが確認された（図36）。

しかし、古道跡は、2～6m附近の幅400cmほどに、硬度10～10.5の路面と推定される硬い地層を認めたが、他の地点と比較するとやや数値が小さく、さらに附近の十分な精査によって確認する必要があるものと考える。

箕輪平III (18) は、平成5年の調

査の結果、箕輪平I地点を古道が通っていないことがほぼ確認されたので、池ノ平遺跡に向う古道の道筋について二つの仮説をたてて検証した。その一つは本沢の手前で箕輪平II地点に向う場合であり、他の一つは本沢の谷を越えて役ノ行者道を行く場合である。この二つの仮説について検討し、現地を踏査した結果、役ノ行者道は、本沢の深い3筋～4筋の谷に橋を架けなければ、



写真59 箕輪平II地区南東の本沢の景観

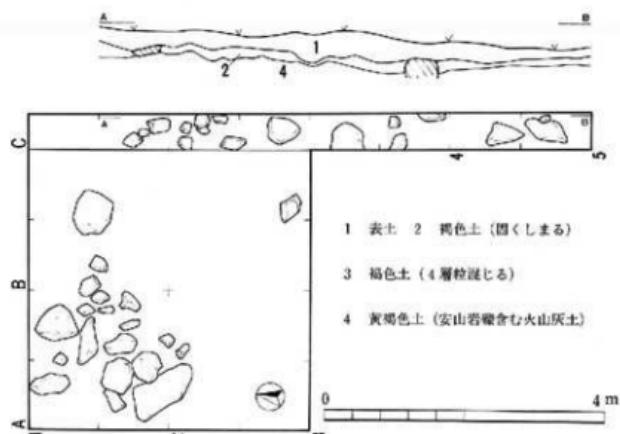


図37 箕輪平III地点実測図

(表土約30cmを削り、2.5+30cm)

深さ cm	N			S		
	0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0
2.5	4.0	6.5	9.0	6.0	9.0	7.5
5.0	5.5	6.5	7.5	10.5	8.0	7.5
7.5	5.5	6.0	7.5	11.0	8.0	7.0
10.0	5.0	6.0	7.5	8.5	Ston	13.5

表19 箕輪平III地点推定路面の硬度

人馬の往来は困難と考えられた。

従って、池ノ平への道は、本沢の手前で谷沿いに下り、郡境の尾根の道と箕輪平II附近で合流して容易に本沢を渡り、緩い傾斜地を三本松に登って池ノ平遺跡・御座岩陰遺跡に向ったものと想定し、調査地点を選定した。

箕輪平III地点は、本沢の谷を目前にした主要地方道諏訪・白樺湖・小諸線から200mほど西方に下った八重原堰の近くで、脇を割橋方向に下る山道が通っている地点である。この地点は、箕輪平II方向へ向う最短路で、山道は北西方へ迂回しながら下っているが、急な斜面ではないので、古道はほぼ直線的に下っているものと想定しておよそ南北にトレンチを設定した。

この結果、およそ30cmの表土層（黒色土）の下層に、硬い灰褐色土層があり、北端から1m附近に山道と直交するおよそ240cm幅の広い側溝と思われる石組が検出された（図版V右中下・図37）。

古道推定部分の南端は、八重原堰のものと思われる川砂が堆積し、やや不安定な要素はあるが、硬度は7.5~13.5で、溝心間の幅が470cm、路面の幅350~60cmを測る（表19）。この地点の占道についても、今後箕輪平II地点との中間点に何ヶ所かの調査点を設定して調査し、より厳密に確認する必要があるものと考えられる。

(7) 三本松地点の調査 (図31-19)

三本松は、最高標高点が1,456.5mで、南平方向から延びてきた丘陵の先端部分に位置し、南側の低地は、音無川周辺の湿原（現白樺湖）地帯で、一帯にコナシの木が自生し、音無川の清冽な流れが茅野方面へ流れていった。現在は農業用溜池として造られた白樺湖の周辺にホテルが立ち並び、レジャー施設が所狭しと建設されて、全く昔の面影を留めていない。

調査地点は、当初三本松の東側へ登る道筋を想定して標高1,450m地点の東寄りにトレンチを設定して調査に着手した（図38-1）。しかし、この地点は、やや硬い地層も検出されたが、地層が複雑に入り組み、古道と推定するには問題があると考え、調査地点を再検討することにした。

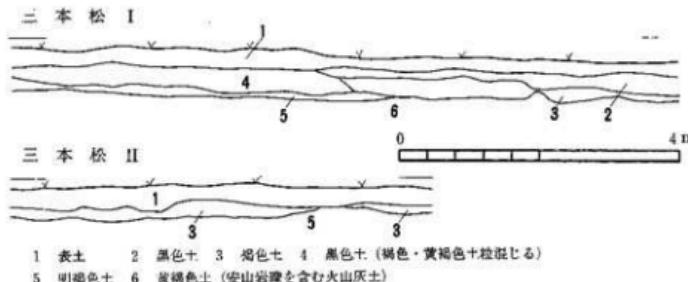


図38 三本松地点の地層断面図

三本松IIは、頂上附近へ登る道を想定し、硬度計による周辺の調査を実施した後、西側に調査地点を選定してトレンチを設定した(図38-II)。

この地点は、20~40cmほどの表土層(黒色土)の下層に硬い褐色土層が認められ、硬度計による調査の結果、地表から37.5~40cm附近に硬度15.5~21.0、幅400cmほどの地層を検出し、古道と推定した。

側溝は明確でないが、東谷側に僅かな落込みがあり、西の山側には溝と思われる変化は認められなかった。

また、この地点の上層には、幅の狭い硬度10前後の地層がいくつか発見されている。この部分は、恐らく後に諏訪への近道として利用した山道の痕跡と思われる(表20)。

(8) 古道調査のまとめ

蓼科山麓の古東山道と推定される古道は、祭祀遺跡の分布と蕨手刀発見地から推考して、佐久・小県両郡境の尾根道と中与惣塚附近を通るいわゆる草原の道があ

深さ cm	E			W		
	0	1.0	2.0	3.0	4.0	5.0
2.5	0.0	0.0	5.0	0.0	4.0	0.0
5.0	2.0	2.0	6.0	0.0	5.0	0.0
7.5	4.0	2.0	7.0	2.2	4.5	3.5
10.0	4.0	2.5	7.8	5.0	4.5	10.0
12.5	5.5	4.0	8.3	8.0	5.5	12.0
15.0	7.0	6.8	9.0	2.0	9.0	10.0
17.5	10.0	7.5	9.0	2.0	12.0	7.0
20.0	10.0	7.5	9.0	2.0	10.0	8.0
22.5	9.5	7.5	9.0	8.5	8.0	12.0
25.0	11.5	7.5	8.5	8.5	8.5	13.5
27.5	13.0	11.0	11.0	9.0	9.0	13.5
30.0	10.0	11.2	15.0	9.5	9.5	13.0
32.5	8.5	11.2	17.0	11.0	11.0	15.5
35.0	8.5	8.5	20.0	14.0	14.0	15.5
37.5	9.5	20.2	21.2	16.5	15.5	19.0
40.0	11.0	16.0	21.2	15.0	15.0	18.5
42.5	11.0	15.2	19.0	15.0	15.3	18.5
45.0	10.0	15.0	19.5	15.5	15.5	20.0

表20 三本松II地点の硬度



写真60 三本松II地点の地層調査風景

設年代については、隣接する勾玉原遺跡と鳴石原遺跡、赤沼平遺跡と鍵引石遺跡の遺物がきわめて類似し、現在確認できる遺物から推定すると、ともに6世紀から7世紀初頭と考えられる。しかし、これは祭祀遺跡の推定年代であって、この資料が直ちに古道の開設年代を伝えるものとはいえない。巨石をともなう磐石(座)の祭祀は、6世紀初頭から出現すると考えられているので、鳴石遺跡の時期は、出土遺物からほぼこれに近い6世紀後半ころと考えて大過あるまい。

しかし、古道の開設は、祭祀遺跡より以前と考えるのが合理的である。神坂峠出土の土師器は、S字口縁の破片など、この時期のものが89片を数え、土師器のピークをしめすと報告されている。

また、入山峠の出土遺物も、S字口縁などの古式の土師器が多く含まれている。従って、その中間点にある兩境峠の古道が、神坂峠や入山峠の古道の年代と全く無関係に存在するとは考えられない。

勾玉原遺跡は、これまでにも祭祀遺物とともに、多くの土師器の出土が伝えられている。しかし、これらの遺物の所在はほとんど明らかでなく、また、遺跡の一带もすでに別荘地として開発され、十分な調査は今後も期待できない。今後開発されていない部分の発見により、さらに精緻な調査研究を期待したい。

古東山道は、一般に5世紀中ごろに開かれたといわれている。夢科山麓の古道も、少なくともこの年代に遡及する可能性が十分考えられる。

夢科山麓の古道は、溝心心間の幅がおよそ400~430cm、路面の幅が350~370cm前後と考えられる。路面の硬度は、かなり硬く10~20、ときに20以上の硬度を示す地点がある。これは古道が、長い年代にわたって利用され、また、多くの人馬の通行をうかがわせるものである。

また、道路構造については、両側に溝を掘り、特に湿地帯に近い地点では、側溝に石組が用いられ、斜面では山側に土留めと考えられる列石をともなう場合がみられた。これらの構造は、古道開設時から造られてきたものではなく、前述のとおり後代に次第に補修され、改修されたものであろう。

最近各地で道路構造の調査が進められているが、埼玉県の「東の上遺跡」の道路構造は、両側溝心心間の幅が12mで、⁵7世紀第3・4半世紀に位置づけられている。また、群馬県下新田遺跡の道路構造も、側溝心心間の幅が12m前後で、構築年代は6世紀中葉以降1108(天仁元)年以前と報告されている。これら2つの道路構造は、令制による古道の規模に近く、長野県下でも最近上伊那郡箕輪町松島の大地上遺跡で、ほぼ同規模の構造が発見されている。

夢科山麓の古道は、明らかにこれより道幅が狭く、出土遺物などからも、それ以前に開かれた古東山道の構造の一部と考えてよいであろう。「諏訪山の嶺道」は、先にも考察したが、史料の記事から8世紀以後の開設であり、佐久・諏訪を結ぶ地方道(伝路)と考えられる。

伝馬については、「延喜式」の「兵部式」に、

「伊那郡十疋。諏訪・筑摩・小県・佐久郡五疋」

とあり、諏訪・佐久郡に各5疋の伝馬が置かれている。伝馬の道・伝路の性格については諸説があり、「令集解」卷三四「公式令」の給駕伝馬の条に、

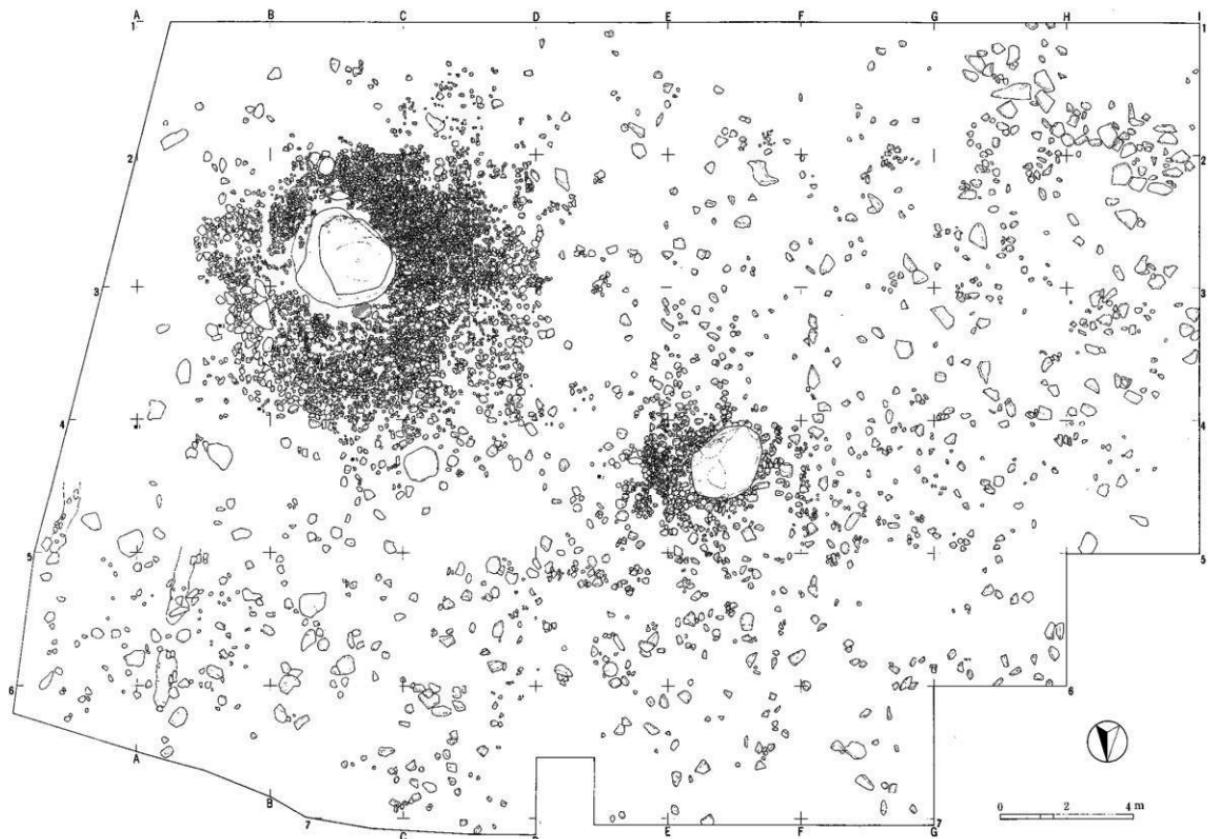
「穴云」として、「事急者駅に乗り、事緩者伝馬に乗る」とある。しかし、駅路と伝路は性格の違いであって、必ずしも「穴伝」の記事どおりではないと考える。

夢科山麓の古道は、佐久郡と諏訪郡を結ぶ最短路であり、東山道(駅路)が開通した後も、地方道(伝路)として利用され、望月の駒を都に送る場合も、この道を利用した可能性が考えられる。

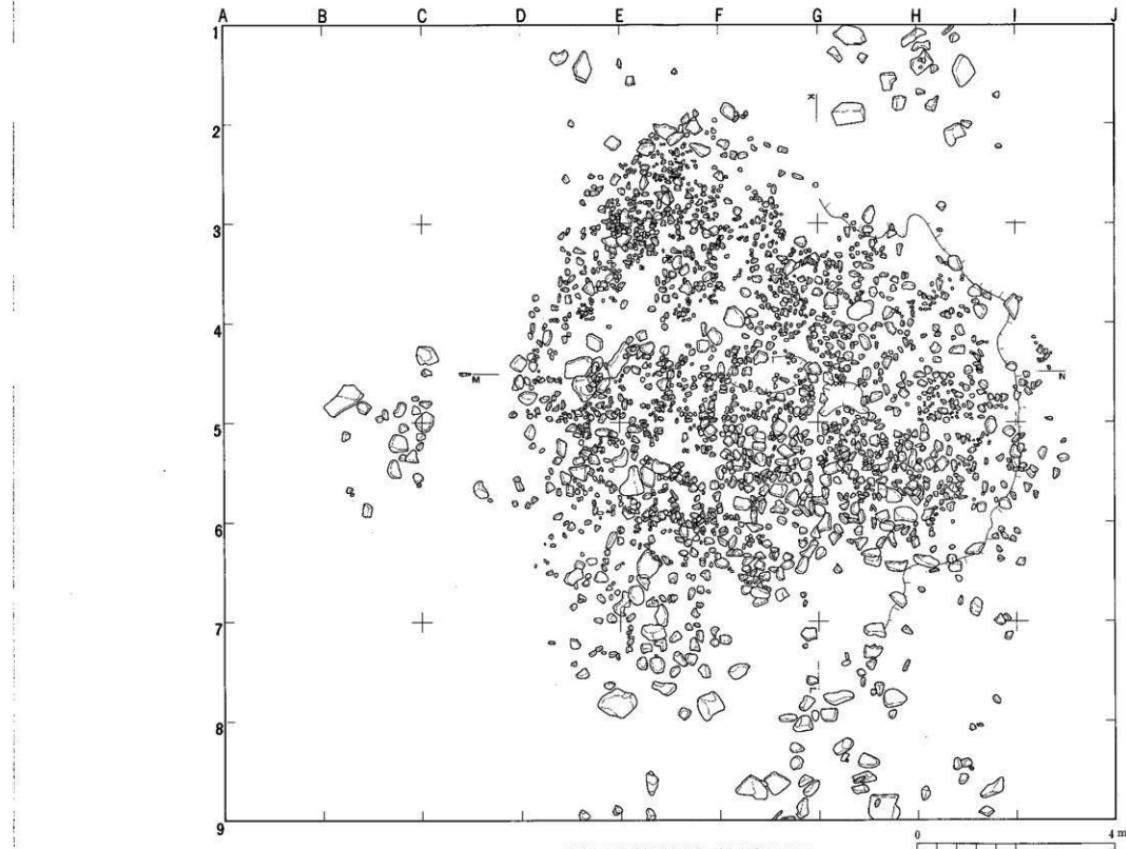
注

- 1 一志茂樹氏「我が国中部山地上代交通路の性格（承前）」
『信濃』第5巻第7号 P28 昭和28年
- 2 木下良「古代の交通体系」「岩波講座日本通史第5巻」P205 岩波書店 1995年
「古東山道の雨境峠附近で幅約六㍍の古道が発掘されているが、占墳時代の道としては広すぎ、一般に伝路と考えられる道幅に相当する。」
と記されているが、鳴石I・II地点、鳴石遺跡の古道側溝心間の幅は、それぞれ432.5cm、約400cm、380~400cmで、鳴石III地点の場合は湧水地点附近の湿地という特殊な地理的条件による構造と考えられる。従って、この地点の調査資料のみによって、この古道を「伝路」と推考することは無理であろう。
- 3 六川源五右衛門「北佐久郡甘酒峠新道御許可願」
六川氏は、この文書によると明治29年9月新道開鑿と開墾事業の目的で、芦田村(現立科町)宇立科八ヶ野兩境に仮住居を定め、明治30年8月に開発許可を申請して、自費・独力で中尾から大門峠出合まで、馬車が通行できる道路の開鑿に着手し、道路近傍へ暴風暴雨防除のため落葉松3万本を植えたとあり、その落葉松がいまも各所に残っている。
- 4 桥山林織「神坂峠」「神道考古学講座 5」P197 雄山閣 昭和47年
- 5 舟田充晴「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」「季刊考古学』第46号 1994年
- 6 伊藤廉倫「群馬県下新田遺跡の道路遺構」「季刊考古学』第46号 1994年
須田茂「東山道と上野国の駅家」「群馬県史 通史編2」群馬県 平成3年





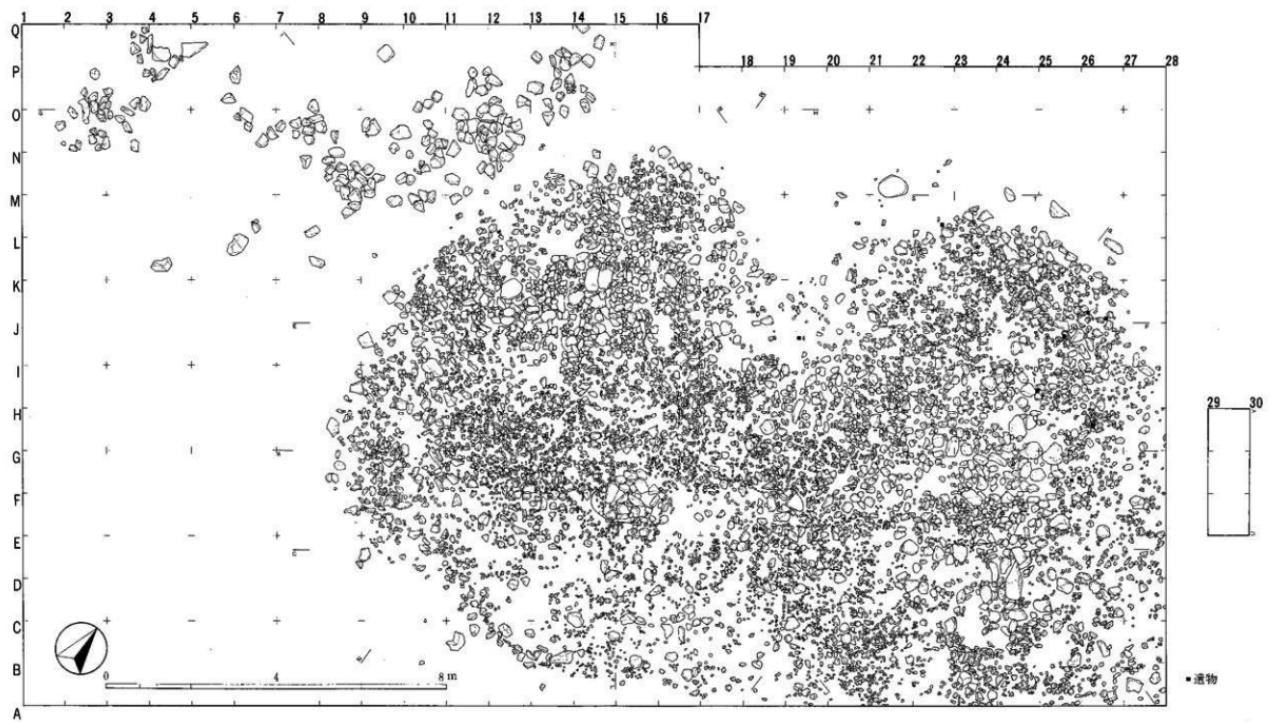
別図 I 西村神社遺跡群・鳴石遺跡実測図



別図II 雨垣峠祭祀遺跡群・法印御遺跡実測図



— 135 - 136 —



別図III 雨垣峰祭祀遺跡群・中与熊塚道跡実測図

雨境峠 —祭祀遺跡と古道—

立科町文化財調査報告書第5集

発行 平成7年3月

編集 雨境峠祭祀遺跡群発掘調査団

発行 長野県北佐久郡立科町
立科町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
